
バカとテストと召喚獣～原作？まあ、ちょっとは守ってみるよww～

真実の語りべww

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 原作？まあ、ちょっとは守ってみるよww

【Nコード】

N9193L

【作者名】

真実の語りべww

【あらすじ】

雨が大好きな主人公は死にます。いきなりだけど死にますねww はい、しにますwwそして、なぜか突然神（笑）にバカテスの世界にwwいきなりすぎだろ、とか言う暇もなくトランスポート↓↓↓。そして、ついたのは原作より昔の時代だった。色々原作前の話なので、ご都合主義だったり、なんかおかしいかもしれませんが許してください。作者に文才は一切ありません。すいません1110TLちなみに、ハーレムにするつもりはありません。あっても2人くら

いです。

序章└僕の死 part 1┘

(前書き)

初めての投稿です。文才はいっさいございませんwwそして、これを書いた理由はみなさんの作品を読んで書きたくなったからです。駄文です。作者の妄想が入ってます。と、いうより大半が妄想ですwwそれでもよければ読んでください。

序章 僕の死 part 1

「はあー、なんていい天気なんだ・・・」

外は雨が降っていた・・・

僕は雨が好きだ。理由？そんなのいらなと思うけど。
まあ、なにかいいことが起きそうじゃないか？
そう6年前もいいことはあった。

そして、今僕は学校からの帰路の途中だ。
傘は差していない。なぜって？雨が好きだからね。

けど、今日はいいいことなんて起こらなかった・・・
そう、今日・・・僕——雪城孝平——は死んだんだ・・・（笑）
普通に学校に行って、普通に授業受けて、普通に友達とだべって、
普通に家かえってラノベとかよんだり・・・
その日常が一瞬でなくなった。

序章 僕の死 part 2

今日は朝からいいことなんてなかった。
朝から、寝坊、登校中に人とぶつかるし・・・
昼は弁当忘れてたし・・・
授業中は問題に答えられなかったし・・・
散々な一日だったよ。でも、最後に雨が降った。それだけがいいことだと思った。

僕は雨が好きだから。
でも、これが僕を見る最後の雨だったなんてね（笑）。

まさか、こんな雨の中ボール遊びしてる女の子なんていないと思っ
てた。

けど、現実いたんだ。ありえねえー！。つか、なにこのテンプ
レ・・・ありえん。

その女の子のボールが道路にそして、向うからトラックが・・・は
あ、これは俺に助けろと？？それしかないだろ？？

もし、神様がいたら恨みます。死んでください。（笑）

僕はトラックに激突。無残に僕の命の灯火は消し飛びました。

そして、意識はブラックアウト――。

序章└神様？あんたが（笑）part┐（前書き）

問題はいつか掲載するかもしれません。しかし、それはいつになる
ことか・・・すいません。短くてすいません。題名と会わないかも
しません。

序章 神様？あんたが（笑） part ？

僕はトラックに激突。無残に僕の命の灯火は消し飛びました。

そして、意識はブラックアウト――。

――はずだった・・・けど、しなかった。

「なんでだよ！？ここは、もう俺は寝るはずだ！？」

『なんじゃ、お前うるさいぞい！？わしは、今バカテス読んどるんじゃ！静かにせんか！』

なんか、いきなりラノベ読んでるから黙れって言われた・・・ちょっと凹む・・・

『なんじゃ、お主か？すまんの、女房かと思つたわい。』

なんなんだこいつは？なんかふざけた、ひげと、ローブと、天使のわつかと、翼、なんかバツクがまぶしい。なんか、どっかにでてきそうなジジーだな。

『おい！お主！いま失礼なこと考えただろ！』

『考えたとも！』

『それを平然にわしに言うとは・・・さすがじゃわい。』

序章 神様？あんたが（笑） part ？

「で、俺を呼んだ理由は『暇だから、自分の好きなラノベの世界に人間を送り込んでみよう』であつてるか？」

『ああ、あつてるぞ！どうだ、いい考えだろう！』

このふざけたジジーは！

「んなわけあるか！！俺の人生どうしてくれるんだよ！！」

『おぬしの人生のう。しかし、お主は人生をそこまで堪能していなかったと見るのだから？』

「つぐ・・・」

『じゃろう？それなら新しい世界で楽しんだほうがよいぞ。』

「そんなわけないだろ！母さんや、父さん、兄さんともまだ全然楽しんでない！彼女だってできないんだ！俺はまだあの世界でやりたいたことがたくさんあるんだよ！」

『そんなこと知るか。わしは神だ。なんでも許されるんじやぞ。』

「そんなわけあるか！お前がかm『ほれ、行つて来い』おい！」

そして、俺の意識はまた黒い混沌に飲み込まれた。

頭に声が響く。

『お主原作なら誰に一番会いたい？これぐらいは決めさせてやろう。』

『

「

『だんまりかい。なら愛子ちゃんの所に行つてもらおうかの。』

工藤愛子だと！くそ、このエロ親父、もとい、神が！

「それだけは、やm——（ヒュン）」

そして、そこは道路の上・・・

そのときも雨は降っていた・・・

第2の人生の最初の日も雨が降っていた・・・

俺はまた雪城孝平としての日々を過ごすことになった・・・

序章く神様？あんたが（笑）p a r t ？く（後書き）

孝平はただのツンデレです。 作者は愛子好きです。

第一章 バカテスの世界、まだ原作までは行かないよ（前書き）

はい、すみません。駄文です。けど、がんばります。ちなみに、もう一回言つと、これは作者の妄想です。

第一章　バカテスの世界、まだ原作までは行かないよ

「あら？孝ちゃん？どうしたの？そんなところで立ち止まって？」

このおばはんだねだ？ああ、そうか俺の新しい母さんか・・・けど、父さんは？

「父さんは・・・？」

俺は勝手に声がでた。そこまでに愛情が欲しかったただけかもしれない。俺は今一人・・・天涯孤独の気分だ。

「言っただしよう！お父さんはどこかへ行っちゃったの！もう、帰ってこないのよ！」

そうか、離婚か・・・父さんはいない・・・母さんも知らない・・・

「そっか、僕って一人なんだね、・・・フツ・・・」

「どうしたの、孝ちゃん？なんで笑ってるの？」

ちよつと引いてる様子で母さん・・・女性が話しかけてくる。

「なんでもないよ？母さん早く行こう？」

「そうね孝ちゃん、ここじゃー、寒いもんね。」

第一章　バカテスの世界、まだ原作までは行かないよ

それから、何年か経った。あのときの僕は6歳だったらしく。小学

1年生だった。

そして、今は12歳。中学一年だ。僕の誕生日は3月10日と結構ぎりぎりなところだ。

変わったことといえば・・・

あの後、たしか初めて来た日から3年後のこと、母さんもいなかった。

僕一人おいて。別に気にはしていない。元々母さんなんて思っていない。

母さんはあっけなく交通事故で死んだよ。前の僕みたいだね。

それともうひとつ・・・

僕は従兄弟の所に泊まっている。不幸中の幸いか、僕の家族には親戚が異常に多い。

全員が全員僕に同情して、色々援助してくれる。助かるが、同情はしないでほしいな。

そして、その従兄弟の家の隣に年の同じ少女が住んでいる。彼女の名前は工藤愛子。

薄緑の髪の毛で、色々、体型から髪型もボーイッシュだ。別に彼女は気にしていない風だが。

そして、彼女は僕の幼馴染。そして、初めての友達だ。

まあ、その話はいつかするだろう。作者が書くのがめんどいからではない。話が浮かばないとか。

そして、突然だが、これからまた2年ほどの歳月が過ぎる。

そして、高校受験を向かえることになる。これは運命『destiny』なのだ。

そして、どうせバカテスに来たのだ。文月高校に入ろうじゃないか。いや、絶対入る。

ちよっと必死に勉強した。別に勉強しなくてもいいけど、どうせF

組みに行きたいのだ。

神（笑）から一応基本知識はもらっている。まあ、F組みはわざと入るとして。

一応勉強できないとな・・・鉄人とかこわそうだし・・・どうせ補習だけど・・・

数カ月後

僕は文月学園に入学した。なかなかでかい。さすがは試験校。うん、ここなら楽しい学園生活ができるかも。ちよつとやる気が出てきたな。

桜がちつちつ——舞っている。そして、校門をくぐる。なんだか原作までただけど、一段落したような気分だな。

はあ、友達できるかな。結局、小、中と原作キャラは愛子にしか会ってない。

しかも、その愛子とはもう離れている。自分の性分、人間嫌い（元）、人見知りのおかげで愛子しか友達という友達がいないのだ。寂しい毎日を過ごすことになりそうだ。

まあ、そんな事はないんだが。

第一章〱バカテスの世界、まだ原作までは行かないよ〱（後書き）

今日から3日間ぐらい投稿出来ません。今日はもう一回ぐらいするけど。そして、短くてすいません。

第一章↳俺の能力！？原作まであとちょっと（前書き）

ふう〜、まあ、ちょっと英検を受けていて最後の抵抗として勉強して更新できませんでした。まあ、これからバリバリではないけど気まぐれに2つかに1、2回ぐらい更新していききたいと思っています。

第一章　俺の能力！？原作まであとちょっと

俺が文月学園に入学してから数ヶ月たったある日の事。俺の家（当然一人暮らし）の机の上に手紙が一通おいてあった。ボクは眼鏡をかけて読んでみた。ちよつと、ぼやけて見えるのは気のせいだろう。

『神より

どうじゃ？元気にしてるか？愛子ちゃんどうじゃ？かわええじゃろ？お主は幸せ者じゃな。まあ、それはそうと、おぬしにいくつか特殊能力を付けようと思ってな。まあ、ひとつは「マインド・リーダー」じゃ。まあ、心を読むといっても、そこまでのものではないぞ。表面上だけじゃ。あと、特定の人物にはできんからな。それは、言わないけど（笑）』

と、なんとふざけた文体で書いてあった。一瞬殺意が芽生えてしまったじゃないか。

第一章　俺の能力！？原作まであとちょっと

次の日の登校中。もう、一年の三学期がちよつと過ぎている頃だ。

『ああー、かつたりー』

『はあ、まったくあいつ・・・寝かしてくれないなんて』

などと、声が聞こえてきた。

「？」

まさか、これがマインド・リーダーの能力か。ていうか、表面的なものじゃないじゃん！

『はあ、今日も塩と水か・・・』

「いや、それはさすがにないだろ・・・」

「え！？」

あ！しまった。あまりにも衝撃的な発言にツッコミを入れてしまった！

「いや、なにか顔色も悪いし。顔に塩と水かって書いてあるし。」

（汗）

「え、本当。どうしよう。やっぱり今日顔を洗ってくるの忘れたからかな・・・」

「いや、それはただの言葉のあやで、本当に書いてあるんじゃないよ。」

「そ、それぐらい、わかるよ！」

いや、明らかに本気にしてただろ。

「それは、そうと、君の名前は？僕は雪城孝平。今文月学園の1年生だよ。」

「え、本当！？僕も文月学園の1年なんだ。名前は吉井明久だよ。」

「吉井明久・・・ああ。観察処分者一番候補の人か。」

「なっ、なぜそれを!?!」

「いや、有名だし。バカなことだ。」

「ひどい、初対面の人にバカってよばれた。うわあああああああああ。」

そういつて、吉井明久、もとい、バカが走り去っていった。

学校でのこと

西村先生が校門に立っている。いやあ、いつ見ても晴れ晴れする筋肉だな。

本当に人間なんだろうか？ちょっと疑問だな。

『はあ、まったく吉井の奴。次こそ捕らえてやる。』

「先生、まあがんばってください。」

「?おい、雪城?俺は何か言っただか?」

「ああ、先生それがですね。かくかくしかじか、でなんか『精神解読』マインド・リーダーがついちゃったんですよ。」

「先生はお前を少しは常識のある人だと思ってたのに・・・」

「すみませんでした。それでは、もうそろそろ授業なんで。」

「ああ、がんばれよ。」

僕自身としては、西村先生を鉄人先生と呼んでもあながち間違っていない気がする。

尚、僕は西村先生のことを先生の中では気に入っている。普通にやっていたら、楽しい先生だ。

教室

僕は原作キャラの誰とも一緒のクラスではない。なんと、言う不運。出欠をとっている。はあ、いつもの授業風景、いつもの先生、いつものくだらない話。

元々、前は高校3年だったので、勉強にはまったく困っていない。

そして、時間が経ち、昼休みになる。

僕は屋上で、昼ごはんを食べるのが好きだ。なんていっても、風が涼しいし、誰もいない。

そんな事を考えていると、途中の教室でなにやら人ごみ（男子）ができている。

そんなことを気になって、僕も教室の中をしてみる。

そこにいたのは——薄緑の髪、凹凸のあまりない体、一人称僕の女性——工藤愛子がいた。

「……どうしたの？雪城？」

どこから出てきたのか霧島が話しかけてくる。ああ、ここは霧島の教室か。まあ、彼女ともちよつとした知り合いだったりする。その話もいつか話す。

しかし、僕は彼女の声に反応することなく叫んでいた。

「愛子さん!」

「え?」

外野がざわざわしている。うるさいな。

「え?孝平君?なんでここに居るの?」

「なんでって、オレここに入学したんだけど?言ったと思うんだけど?」

「え・・・そうだけ?あはは、ごめんねボク忘れてたよ てへ」

「そんな、最後に『てへ』なんてつけても・・・」

『あいつら、なんなんだ?』

『まず、あいつだれだよ?』

『いきなり出てきて、転校生に話しかけるとか?』

『いや、雰囲気的に知り合いじゃね?』

やっぱり、外野がうるさい。

「愛子さん、僕今からお昼食べるんですけど。一緒に食べますか?」

「そうだね。一緒に食べようよ、なんか久しぶりだね。」

「じゃ、じゃあ、行きましょう。」

「え、どこに行くの？ボクここでもいいよ？」

「僕がだめなんです・・・」

そういつて、僕は彼女を屋上へと連れてった。

――屋上で――

「まさか、孝平君がここにいたとは、ボクもびっくりだよ。」

「いや、僕もびっくりしましたよ。まさか、愛子さんがここに編入するなんて。」

「まあ、親の都合だね。最初は、あんまり乗り気じゃなかったけど、孝平君がいるんなら別かな。あ！そっか、だから親がニヤけながら、『行けばわかる』とか言ってたのか。」

あの親は何を言ってるのだろう。

そんなこんなで、ボクは愛子と昼を食べ終わり教室に帰ろうとするときに。

「あれ？なんだか、景色が・・・」

なんていう、テンプレなセリフをはき、倒れた。

第一章↳俺の能力！？原作まであとちょっと（後書き）

なにか、おかしい点、誤字脱字などがございましたら、ご報告ください。この口調？気にしないでくださいww

第一章↳次から原作だといいな・・・↳（前書き）

次回から原作ですって言うても次回は主人公紹介にしたいと思えます。色々と設定があるので・・・

第一章↳次から原作だといいな・・・」

僕が倒れてから数時間たっとならしい。らしい、というのは当然僕は気絶していて、誰か——この場合愛子が妥当だが——が僕を保健室までつれてきてくれたんだと思う。

そして、起きると・・・手紙が一通。前神（笑）から来た手紙によく似てる。

『神より

あ、言うの忘れてたけど、マインド・リーダーはちょっと意識して使わないと全開モードになって、すごい疲れるよ。あと、ちょっと視力もよくしてあげたから。』

あの神（笑）いつか殺してやる。そういうのは使わせる前から言うのが通例だろ。

第一章↳次から原作だといいな・・・」

そんな事を考えていると愛子が入ってきた。

「あ、孝平君起きたの？ いやあ、もうボクびつくりしたよ、いきなり孝平君ったら倒れちゃうんだもん。」

「ああ、ごめんね愛子さん。このごろ徹夜で色々してたから。ここまで運んでくれたのは愛子さん？」

「そつだよ。それにしても・・・」

愛子がニヤけている。なにかまずい予感が・・・

「どうしたの？」

「運んでる間に孝平君ならボクの大事なところ触ったり、拳句は支えられずに倒れちゃうし。もう、色々あったんだよ。」

「・・・マジ？」

「うん、マジ。やっぱり孝平君もそういうことに興味あるんだね。なんだったらボクが今夜教えてあげようか？実技。」

「い、いや、遠慮しとくよ。」

「いや、すごいしたい気持ちなんだけど。こんなに早く手を出したら、原作が崩壊するかも。あ、けど。愛子って何気に登場回数少ないなあ。うん。やっぱし、やめよう。という、答えに行き当たり辞退した。」

「そう？ボクとしては、孝平君だったらいつでもオツケーだよ。」

それはとってもうれしいじゃないか。そんな事いわれるとなあ。年より長い精神年齢の自制心とか理性とかが壊されてしまいそうだよ。

「なんだったら、今ここで触ってみる？」

と、言って自分の胸元を指差す。

「誰か着たらまずいよ。」

「へえ、けど、否定はしないんだね。」

「あ・・・」

しまった・・・ちよつと本音がああああ！！！！

そう思つて頭を抱えて悶えている僕を見て愛子はまるで子供のよう
に笑つてゐる。彼女が原因なのに・・・

「あ、もうこんな時間だ、ボクそろそろ部活だから行くね。」

と、時計を見てみると4時くらいだった。ちよつとぼやけて見えに
くい。そつか、今さつき『視力をよくした』とか神（笑）が言つて
やがつたな。

「ああ、バイバイ。また明日ね。」

そついつて、愛子は部屋から出て行つた。

そつして、ボクもその後を追うかけるように、十分ぐらい後に保健
室を出た。それつて追いかけてない？気にしないでくれ。

帰る途中

「お兄さんバカなんですネ。」

とか聞こえてきたからそつち見てみたら、吉井君と知らない小学生
がいるし。

吉井君すでに小学生にまで。と、言うことは彼女は葉月ちゃんか。
ふん、脳内イメージよりかわいいな。あの神（笑）に絵心がない
だけか？

と、なんとも変な想像をしていると、とばっちりを受けたくないの
で。俺はそうそつと退散した。

こんなところでつじ・・・・西村先生に目を付けられたくないからね。

そして、僕はやっと、家に着いた。

「はあ、今日は何か色々と疲れたな・・・」

まあ、愛子に再会できたからいいか。うん、いいや。と、割り切つて、その疲れを振り払ってみた。

まあ、一人暮らしなので当然その後には夕飯の準備と洗濯をしないとイケないのだが・・・

まず、風呂に入ろう。うん、風呂に入ろう！大切なことだから2回言ってみた・・・

・
・
・
・
・
・
・

そして、月日は流れて振り分け試験の日！

登校中に珍しくもなく愛子と会った。

「孝平君、今日は振り分け試験だね。」

「そうだね、それぐらい知ってるよ。」

「ボクね、友達とAクラス行こうって決めただけど。孝平君もAクラスだよ。頭いいし、毎日勉強してるし。」

まあ、確かに普通にやれば普通にAクラスの下にはいける实力は持っている。が、……

「ごめん、愛子さん。僕どうしても、Fクラスに行かないといけないんだ……。だから一緒にAクラスには行けないよ……」

「なんで？『行かないといけない』の？それっておかしくない？」

「それは、答えられないよ。例え、相手が愛子であっても。」

このとき僕は無自覚に愛子と呼んでいた。

「ぼ、ボクと一緒に嫌なの？」

「そ、そんな！僕は愛子と一緒にいたいよ！」
つい、カツとしてしまい大声で言っていた。

「そ、そんなこと大声で言われると恥ずかしいんだけど……」
と、小声で言って頬をほんのり朱で染めている。

因みに、この会話は登校中のものです。当然周りには生徒がたくさん……

『チツ、朝からいちゃつきやがって……』

『なっ、我等が工藤さんに愛の告白か！』

『まあ、まあ、朝からお熱いこと。』

『俺も告白されたい!』

など、色々な言葉が飛んでくる。最後の奴はおかしい奴だ。

そして、僕と愛子どちらともが少し気まずい空気で校門まで歩いた。まだ、周りの人が見てくる。うざったいな。

そして、校門でも鉄人に『そういうのは人のいないときにやれ』などといわれてしまった。

そして、テストが始まった。僕のテストはいつまでも白紙のままではつきし言っで、テストの間暇だったな。

そして、僕の原作開始までのカウントダウンはもうすぐ終ることになった。

プロフィール（前書き）

なんだか遅れてすみません。

プロフィール

名前：雪城孝平

クラス：F

性別：男

身長：164 （ちょっと小さいと思って悩んでるか）

体重：考えてない。

性格：人見知り、友達思いではない（愛子を除く）、優しい（ちょっと矛盾しているが）、真面目

装備？：眼鏡、後でコンタクトに変えるつもり

得意教科：なし

苦手教科：なし

いわゆる器用貧乏。

特異点：鈍感ではありません

主人公は精神不安定です。いつもはキャラ作って『僕』ですけど、怒ったり考えているときは『俺』や、暴言もはきます。

愛子とは幼馴染、というか、もうそれ以上かも？友達思いでないと

いうのは、友達になっただけで、友達にならないのでそうさせてもらった。顔は普通より上くらいで、特技という料理になる。すこし、女性の趣味のようで彼自身はちょっと悩んでいた。彼は器用貧乏と言っているが、周りから見るとオールマイティーにも見える。彼自身愛子への想いには気付いているが否定しているほどだ。彼女は彼の恩人であって、それ以上にはしないと決めたからだ。まあ、この話はいつかの機会に。因みに、他の原作キャラとはそこまで面識がない。霧島程度。恋愛に関しては愛子以外は興味がない。俗に言うゾッコンである。

プロフィール（後書き）

あと、愛子のキャラが変わっていると思いますが、それは作者の妄想が含まれているからです。お許しください。

第2章└これから原作だ！？やっただよ、本当に疲れた・・・┘（前書き）

今回も短いです。はあ、なんだかもつと後のほうのネタはたくさんあるのに。試召喚戦争のやつがめんどくさく感じてきました。

第2章　これから原作だ！？やっただよ、本当に疲れた・・・

その日僕は夢を見た——僕が雪城孝平であつたときの夢。

元の高校3年生で、普通の日常を過ごしていたあの時代のことを。

朝起きて、会話もなく朝ごはんを食べる。家をでて、15分くらい歩いて学校に着く。

学校について、HRが始まるまで読書をする。元々友達が少ない俺は、友達がくるHRぎりぎりまで本を読んでいる。

種類は色々；ラノベ、古文、文学小説　etc.

そして、学校が始まり、昼飯は友達と、放課後は即帰って宿題、勉強mPc、アニメなどなどの娯楽を楽しむ。

そして、一日が終わりまた次の日、俺の毎日はこれの繰り返し。

そんな夢を見た。たぶん、色々起こる予兆だろう。

今日、俺は原作に介入するのだから・・・

第2章　これから原作だ！？やっただよ、本当に疲れた・・・

それは、春、桜がちつちつ——舞っている、この時、僕は春休みぶりに愛子と会った。

愛子とは何気に春休みの間会ってない。愛子は家族旅行、俺は色々バイトやらやらで忙しかったのだ。

その間俺は眼鏡からコンタクトに変えた。なにげかって？あの神（笑）が勝手に俺の視力をよくしたから眼鏡の度が合わなくなったからだよ。

あとは、ちょっとイメチェンでもしてみようと思ったただけだ。そう、そう思ったただけだ。

そんな僕たちのあつて最初の会話は。

「……孝平君？」

「そうだけど？どうしたの？」

こんな奇妙なものだった。

どうしたのだろう？愛子と目が合つと愛子はすぐに目をそらした・

ま、まさかこれはテンプレの『イメチェンした幼馴染がかっこよくてしかたない』みたいな展開か？

「ねえ、そんなに僕がかっこいいかな？」

「え……うん、かっこいいと思うよボクは。」

と、言つて愛子はまじまじとボクの顔を見て『コンタクトもいいけど眼鏡も捨てがたいかも……』とかほざいてる。

そんなこんなで、愛子といつもどおり校門まで歩いていると。何か変なものでも見るかのような目でこつちを見てくる人がいるのだ。はっ、俺つてそんなにかっこいいのかな？とか、考えてる自分がバカだと思えてきた。まるで、吉井明久じゃないか……

そんな感じで、校門まで着くと、鉄人が待っていた。

「「おはようございます、西村先生。」」

「おはよう、雪城と工藤。お前等はいつも仲がよくて感心だよ、先

生は」『まったく、吉井と島田もこれくらい仲がよければ・・・』

「それは、無理ですよ先生、あの二人はそうでないと、あの二人ではありませんから。それに、あの二人は超絶仲がいいですよ。」
と、言つてあげた。

「ん？お前、それ使つと疲れるんじゃないのか？」

「？」

愛子が一人だけ不思議そうに頭を傾げている。かわいい・・・

「いえ、一瞬だったら全然疲れません。常時全開だと、色々な声も聞こえてすごい疲れるんです。対象を一人に絞ればさほどではありません。」

「そうなのか・・・まあ、それはおいといて。ほれ、これがお前等のクラスだ。」

と、言つて。僕たちにひとつの封筒を渡してきた。

僕と愛子はそれもらい。愛子は空けて、僕はそれを破つた。
もう、僕のクラスは決まっているからね。

「ふう。なんでお前はわざわざあんなことをしたんだ？理由があるのだろう？なければ、お前は絶対工藤と一緒にいたがるから・・・」
と、何かあきれたような表情で鉄人がこちらを見ている。

「僕の使命ですよ。僕の生まれた理由とも言えます。」
僕は多少ぼかして、けど本当のことを言つてる。

「「？」」

鉄人と愛子両方がわかってないようだ。まあ、わかったら困る。

「ごめんね、愛子さん。けど——」

「いいよ、もう何回も謝られてるから。まあ、その分、ボクの言うことは何かひとつ聞いてくれるって言うてたし。許してあげるよ。」
そう、そんな約束をしたんだ。確かあれば、俺が寝起きで夢つつつのときに、ほぼ勝手に愛子がした約束なのだが・・・

「ありがとう・・・じゃ、行こうか？愛子さん。」

「うん、行こう。」

そう言って、二人で校舎のほうに足を運ばせた。

第2章　これから原作だ！？やっただよ、本当に疲れた・・・（後書き）

短くてごめんなさい。

第2章↳教室にこんな違いが・・・↳(前書き)

プロフィール変えました。読んでください。これからも読んでください。

第2章　教室にこんな違いが・・・

僕たちが最初に行ったのは、愛子のクラス。つまりAクラスだ。そこに行つて、俺はこの学園の非常識さを再確認した・・・

「わお、これすごいね」

愛子も大変喜んでゐる。

第2章　教室にこんな違いが・・・

まず、ここの設備：巨大ディスプレイ、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートetc・・・
なんなんだここは？教室じゃないだろ。この学園はバカなのか・・・
ああ、ここはバカの世界か・・・

「す、すごいな・・・」

俺は純粹に驚いている。この教室に。この世界のバカさに。

「あ、愛子、あはよう。」

「あ、おはよう優子！」

と、言つて愛子にあいさつをしたのは木下優子だ。木下秀吉の姉で、双子。似すぎている。俺には違いがわからない。

「あら、それが愛子のいつも言つてる『孝平君』？」
なんか、いきなり『それ』呼ばわりされた。

「たしか、眼鏡じゃなかったっけ？」

「それがねえ、孝平君が春休み中にコンタクトに変えたんだよ。ボクも最初はびっくりしたけど。こっちの方がかつこいいんだよ。」

「へえ、そうなの。秀吉のほうがかつこよく見えるけど。」
俺と秀吉を並べて比べること自体が間違っているぞ。

「そうかなあ、ボクは断然孝平君がいいな。」
そこで、断然を強調しないでくれ。恥ずかしいからな。

「ありがとう愛子さん。そしてはじめまして、これからよろしく願います、木下優子さん。」
そして、僕は彼女に微笑みかけた。

「こ、こちらこそ・・・」

そして、頬を染めて急いで教室に入った——もとい、逃げ込んだ。

Aクラス 木下優子 vs Fクラス 雪城孝平

LOSE

WIN

見たいな感じで。

「さすが、孝平君。微笑みひとつで優子に勝っちゃうなんてね。これが平凡さ故の勝利かな？」

と、愛子が意味不明なことを言ってる。『平凡さ故の勝利』ってなんだよ。

「ま、当然だろ。俺の本気はもっとすごいぜ。」

「そうだよ。昨日なんて寝かしてくれなかったもんね。ボクまだ腰痛いよ」

と、爆弾発言をしている。（ー）ノ。ポイツ ● ＊みたいな感じで。

『なっ！隊長アイツをFFFにかけましょう！』

『そうだ！そうだ！モテル男は全員血祭りだ！』

『まあまあ、朝からお熱いこと。』

『くそー！！俺の愛子さんがあー！！！！！！！！』

『私もお姉さまと、ハアハア・・・』

などと色々聞こえてくる。最後のは意味わかんないけど、お姉さまって人かわいそうだな（笑）。

「な、なに言ってるんだよ！ちよつ、皆も勘違いするな！」と、訂正しようとするが。

「ひどいよ！孝平君、あれは全部遊びだったの！せっかくボクの初めてあげたのに！」

などと、愛子が言うから、勘違いがまた深まる。はあ・・・。

「わかった、愛子。そんなに俺に無視してほしいのか？そうなのか？」

「ちよつ、違うよ！ごめんなさい、孝平君、もう言いませんから許して！無視しないで！されたら、ボクもう生きていけないよ！」

と、急いで謝ってくる。まあ、俺と愛子は、頼り、頼られの存在なのだ。

「ああ、わかったから。俺は教室に行くよ。帰りは迎えに来るから。」

「うん、じゃあね」

と、別れを告げ、俺は自分のクラス——Fクラス——に向かっていた。

作者休憩（教室までの間）

かつこの内容が逆じゃないか？気にするな！

ふう・・・ここはどこだ？まさかの、迷子になってしまった！なんてオチはないよ（笑）。

いやあー、ヒビの入った壁、キノコの生えた畳、ちゃぶ台！、座布団・・・なんですか？ここは？

廃墟じゃないか！！！と、言いたかっただけです。はい、すみません。

まあ、最初からわかってたことだけださ・・・実際に来るともつとひどいことだな・・・

ここってもう学校じゃないよ。

まあ、まずは教室に入ってみようか。うん、勇気を出して入ってみよう。

「くっ、このドア、なかなかやる・・・！」

僕はドアと格闘(?)中だ。なかなか開ける勇気が出ない。埒が明かない。というか、バカみたいだ。いや、実際バカだ。
まあ、もうやめよう。入ろうか……。嫌だな。入りたくないよ母さん。

ガラッ(ドアの開く音)

ヒュッ(誰かが殴る音)

シュバツ(僕がよける音)

「早く座れ、このウジ虫野郎!!」

なんと、入った途端、殴られかけて、その拳句罵倒された。ちよつとむかつくな。

「って、なんだ明久じゃないのか。ああ……。ごめん、怒ってるか？」

ちよつとは、人の気持ちがわかるみたいだな、この赤髪。坂本雄二。意外に背が高く、筋肉もいい具合についている。

ここで、俺の頭によぎった選択肢は3つ!

?「へえ、よくわかったね!褒めてあげようか!？」と嫌味っぽく。

?「いや、怒ってない。人違いは誰にでもあるものだしね。」と大人っぽく。

?「何を言ってるんだ!僕が明久だよ!雄ひどいよ!あんなことやこんなこともしたのに!」とバカをする。

まあ、ここは無難にさ。……じゃない、俺のキャラどうするんだよ。このごろキャラがなってるないな。

「いや、怒ってないよ。人違いは誰にでもあるものだしね。」

と、冷静に？を取ってみたところ。

相手がびっくりしてる。なんでだろう？

「あの、どうしたんですか？」

相手が我に帰ったかのように、ハッと目が覚める。

「いや、すまない・・・Fクラスにこんな常識人がいるとは思ってなくてな。」

ああ、そういうことか。それなら納得だね。

「まあ、しょうがないよ。ここにはバカとかバカとか吉井明久しか来ないはずのクラスだからね。」

「ああ、違いない。」

「これはどういった席なの？」

「ああ、自由席だぞ。と、いつか俺が誰か聞かないのか？」

「知ってるからいいよ。君は、坂本雄二、吉井明久の悪友。Fクラス最高成績者、そしてFクラス代表。Aクラス代表の霧島翔子とは幼馴染。実は小学生の頃に問題をおかし、そのあとに霧島が惚れることに。これぐらいなら知ってるよ？」

「いや・・・なんで知ってる？おかしいだろ、翔子らへんが、この学園のやつらは全員アイツが同性愛者だと思ってるはずだぞ。」

「僕の名前を教えてあげるよ。僕の名前は雪城孝平。以後お見知りおきを。」

そういつて、僕は適当な席に座わりにいった。

そして、一拍子おいて

「すいません、ちよつと送れちゃいましたっ」

と、吉井明久、もとい、バカが入ってきた。

「早く座れ、このウジ虫野郎！！ああ！！」

「なつ。雄二いきなりそれはないでしょ！僕の登場が台無しじゃないか！」

と、吉井明久なりの反撃が始まった。そこに突如俺が突入。

「元々、君の登場なんてスタッフロールみたいに流されるだけだから。もっと目立って逆によかったんじゃないか？」

「ああ、そうかもな。よかったじゃないか、明久。俺に感謝しろよ。」

「感謝できるか！それに、君誰？人を勝手にバカ呼ばわりしてくれて！」

「いつもされてるだろ。明久諦めろ。お前はもう学校のLegend『伝説』となっているんだ。」

「まあ、小学生に『バカなおにいちゃん』と呼ばれてるんだから、別に僕に言われようがいいだろ。」

と、俺が前ちよつとあつた場面を思い出す。

「なぜ、それを！じゃ、なくて！」

と、明久、的外れの発言！

「おい、明久！マジかよ！」

「違うよ！あれは、別に僕が小学生にバカ呼ばわりされてたんじゃない！」

「葉月ちゃんだっけ？」

「なんでそれを！」

と、明久が、驚くを越して引いている。まあ、当然だろう。自分以外知らないはずの出来事なのだ。

『この人もしかして危険！？』

「僕をなめないといい。それと、別に僕は危険じゃないからね。人を疑うのはよくないよ。」

「なぜ、僕の考えが！まさか、お主邪気眼の使い手！」

「なはず、ないだよ。まあ、読心術だよ。」

まあ、普通はこれではだませないのだが・・・

「ああ、なんだ読心術か。安心したよ。」

明久ならこのとおり。かわいいそうだな。

「やっぱし、だめか・・・」

「ああ、すまない。だめなんだ。」

雄二が謝ってきた。申し訳ない・・・

「？」

当の本人はわかってないのか・・・

「まあ、僕の名前は雪城孝平。以後お見知りおきを。」

「ああ、僕の名前は吉井明久。気軽に明久でもアキでもよんでいいよ。」

「わかったよ明久。」

と、言われたとおり明久と呼ぶ。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」
と、入ってきたのは我等が担任、福原慎だ。

「「「あ、すみません。」」」
と、三人揃っていつて。教室に入っていつた。

これから起こる波乱の戦乱の世の中を知らずに。僕以外は。

第2章↳教室にこんな違いが・・・↳（後書き）

またですが、プロフィール変えました。読んでください。

第2章 このクラスはやはりバカだった・・・まあ、知ってたけど（前書き）

すみません、ここはほとんどが、原作と同じかもしれませんが。読んでつまらないと思います。

第2章 このクラスはやはりバカだった・・・まあ、知ってたけど

クラスの全員が座った。かのように思えたが、まあ、Fクラス、寝てるは、遊んでるは・・・学校じゃないな。

俺は自分の席を無難に雄二の隣らへんにしといた。明久の横は、特等席だしな。

「お前は、なんでそんなに笑ってるんだ？」

雄二は僕に聞いている。笑ってる？ああ、ちよつと前読んだマンガのシーン思い出してたんだ。なんていえないしな・・・

「お前は、このクラスに不満はないのか？」

俺の答える隙もなく有事がまた聞いてきた。まったく、質問は一回に一回だぜ。

「不満？そんなものあるはずがないじゃないですか。ここをどこだと思ってるんですか？欲しければ奪えばいい。」

雄二が、なにか感心の眼差しで見ている。

「ほお、なかなか見所があるじゃないか・・・お前とは友達になれそうだな。」

「僕はなれそうにありませんけどね・・・まあ、一応・・・よろしく雄二。」

「あ、ああ、なかなか拒絶するんだな。まあ、俺もお前もまだお互いを知らないわけだしな。まあ、俺は絶対上手くいけると思っぜ。」

「そうかもね・・・君となら、ね。」

第2章 このクラスはやはりバカだった・・・まあ、知ってたけど

「えー、おはようございます。Fクラスの担任になります――

と、言つて黒板に自分の名前を書こうとした

・・・福原慎です。よろしくおねがいします。」

ところ、チョークすらなかった。

僕は純粹に笑ってしまった。引き攣った笑みで。

「ま、まさか、本当にチョークすらないとは・・・」

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば、申し出てください」

いや、もう不備だらけじゃないか。どこが設備されてるんですか？

『俺の座布団、綿が入ってないんですけど。』

「我慢してください。」

『俺の卓袱台、脚が折れてます。』

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください。」

『窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど。』

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直し

てください。」

案の定、色々と不満の声が聞こえてくる。それはそうだろう、かび臭い畳、ヒビの入った壁、半分足が壊れてるちゃぶ台。不満を上げないやつがいたら、つれてきてくれ。尊敬するから。

「では必要なものがあつたら、極力自分で調達する様にしてください」

この教室はなんですか？はあ、實際来るとわかるね。最低のクラスだ。学校じゃないだろ。

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします。」

と、言われて一番廊下側の人が立ち上がり。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年、よろしく頼むぞい。」

と、ジジイ言葉で喋っている。彼は木下秀吉。本人は僕のこととは知らないだろうけど、僕は彼のことを知っている。なんだか不思議だな。

彼は、男とは思えない容姿で、なぜかジジイ言葉で喋っている。この、男だらけのFクラスの元気の元のような存在だろう。

「……土屋康太」

そんな感じで、脳内で解説していると、次の人、土屋康太が名乗った。なんて無愛想なんだ。まあ、彼だからしょうがないけど。

彼は『寡黙なる性職者』ムツツリー二と呼ばれるほどの伝説級のムツツリだ。本名だとあまり知られていない。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書き

が苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので趣味は……」

と、何気に女子がいるじゃないかと、期待を上げた人は残念。彼女は――

「吉井明久を殴る事です。」

明久にゾッコンなのだ。本当に明久以外の人は残念だったね。

しかし、なんてひどい趣味だろう。下等というか、野蛮というか。まあ、島田らしいが……。

お、次は俺の番だな。

「あー……名前は雪城孝平。特技はなし。まあ、これから一年間よろしく。」

と、康太みたいに無愛想な自己紹介をする。

『雪城孝平？どっかで聞いたことあるな。』

『死刑リストに載ってるんじゃないか？』

なんだよ、その物騒なものは。

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね。」

『ダアアーリーーン!!』

きもい！だまれ！うわぁー！鳥肌が！

明久め！なんて事してくれるんだ！！

「……失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします。」

言った本人も軽く引いている。これぞ、Fクラスの力か・・・見くびっていた・・・

「なんていう、不愉快な朝なんでしょう。」

「それは同感だな。」

まあ、独り言のつもりだったけど雄二が答えてくれた。

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

そこにいたのは、息を切らせて、胸に手を当てている女性とがいた。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします。」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

と、元気よく(?)自己紹介した。無愛想だが、まあがんばったので無愛想にならないだろう。

『はいっ、質問です！』

「あ、はいっ。なんですか？」

『何でここにいるんですか？』

端からきいたら、なんて失礼な質問なんだろう。しかし、彼らには当然の疑問だった。

彼女——姫路瑞希——は学年次席と呼ばれていて、成績はトップクラスのはずだったからだ。

そんな彼女が学校の最下層に位置する、Fクラスにきたら、それは疑問に思っだろう。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

なんて、不幸な少女なのだろうか。そんな理由でこれから起こることに巻き込まれるとは……

まあ、彼女は明久といれてうれしいだろうけど。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？ あれは難しかったな』

姫路の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて』

『黙れ1人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

と、次から次と言いつけが飛んでくる。やっぱし、こいつらはバカなんだな……

「で、ではっ、今年1年よろしくお願いします！」
と、言って雄二と明久の間に座る。僕の2つ横だ。

「あの、姫じー「姫路。」。」

と、明久が話しかけようとしたときに雄二が割り込む。なんて、地味な嫌がらせだ。

「え、なんですか？えーと・・・」

「坂本だ。坂本雄二。」

「はい、でなんですか坂本君？」

「体調は大丈夫か？」

と、本題に入る。

「あ、それは僕も気になる！」

と、明久が無理やり会話に入り込む。

「よ、吉井君！」

と、姫路が驚いている。

「姫路。明久が不細工でごめん。」

と、さらに雄二が嫌がらせを。明久涙目だぞ。

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

と、言っつて明久の顔を見てモジモジしている。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っているやつがいあたような気もするし」

「え？それは誰——」

「そ、それって誰ですか！？」

「確か、久保——」

「——利光だったかな」 久保利光 ♂（性別／オス）

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな
と、慰めの言葉のつもりだろうか。」

「半分冗談だから、安心しろ。」
と、さらに慰めの言葉が。しかし、半分ってどんな感じだろ？

「で、姫路。身体の調子は大丈夫か？」

「あ、はい。もうすっかり元気です。」

と、元気に答える。まあ、元気といってるんだから当然だろう。

「ねえ雄二！残りの半分は何！？」

「さて静かにしようか先生もこっち見てるしな。」

「残りの半分は何なんだよおおお!!」

明久は騒ぐのをやめなかった。うつとうしいな。

と、言つて先生のほうに注目する。

先生が教卓を軽く叩くと。

バキィッ バラバラバラ……

と、教卓では出せないような音を出して崩れた。周りの人はそれを眺めることしか許されなかった……

「え………替えを用意してきます。少し待っていてください。」

と、最低の設備なんだよ! ねじが外れてるとかの次元じゃない!

そんな事を眺めている端で姫路は咳をしている。それを、見た明久がなにか決意でもしたような顔で

「……雄二、ちょっといい?」

と、雄二になにか提案するように話しかけている。

「ん?なんだ?教室の外で話すのか?それなら、おい孝平お前も来い。」

と、なぜか、俺まで巻き込もうとしてる。

「丁寧に断りさせてもらうよ雄二。」

と、俺は断る。こんなめんどくさい話きいてられっか。つか、作者

が書きたくない。

「そうだよ、雄二。僕は雄二に聞いて欲しいんだ。孝平は来なくていいよ。」

と、明久が、きつと無自覚で俺のことを拒絶したんだろう。そう、信じたい。

そう言って、彼ら二人は教室の外に出て行った。

第2章 このクラスはやはりバカだった・・・まあ、知ってたけど（後書き）

誤字脱字などがあつたら、指摘してください。これからも読んでください。読んでくださってありがとうございます。後、PVアクセスが10000越えました。これっていいのでしょうか？

第2章↳引き金を引く、英語で『trigger』といいます↳（前書き）

すみません、眠くて更新が遅れました。色々とむちゃくちゃでつまらないかもしれませんが、それでもいいのなら、読んでください。

あと、秀吉の口調はあまり得意ではありません。すみません。

第2章　引き金を引く、英語で『trigger』といいます

「やあ、木下君。本当にお姉さんとそっくりだね。」

「ん？お主は誰じゃ？」

まさか、コイツ・・・！この短時間で忘れるなんて、人間業じゃない！俺ってそんなに空気なのかぁ！

と、俺は頭を抱えながらのた打ち回っている・・・変人だ・・・

「ど、どうしたじゃ？腹でも痛いのか？」

「はっ！俺としたことが！ああ、なんでもないよ。僕の名前は雪城孝平だよ。今さっき自己紹介したばっかなんだけど・・・」

「あ、ああ、すまぬ・・・お主が存外空気のように感じてしまったのう・・・」

なっ。コイツひでえー！原作じゃ、こんなやつじゃなかったのに・・・

・

「ひどい！こんな扱い受けたのははじめてだ・・・」

「すまぬ、すまぬ。それで、お主は姉上の知り合いなのか？」

第2章　引き金を引く、英語で『trigger』といいます

「そうか、そうか。姉上もお主の笑顔に負けたのか。」

「ああ、負かしてあげたよ。ちょっと、すっきりするくらいにね。」
と、誇らしげに言った。誇っていいことじゃないけど・・・

「それは、誇って言うものではないぞい・・・」
あ、秀吉からも指摘が。コイツまさか、俺の思考を！

『それにしても、明久と雄二はなにをしているのじゃろう？』
ほう、秀吉そのことが気になるのか。ふっふっふ。教えてあげよう
じゃないか！

「あの二人なら、今試験召喚戦争の話しをしてるよ。（ボソッ）」
さあ、どんな反応を返してくれるかな？

「なぜ、わかるのじゃ？あの二人は今廊下にいるのじゃぞ？」
と、まあ、当然に疑問を持っている。うん、さすがはFクラス一の
常識人とも呼べる秀吉だ。感動した！

「どうしたのじゃ？」

と、秀吉が震えている（感動で）を構ってくれている。お前に感動
してるんだよ！なんて、いえない。

「い、いや、なんでもないよ。ああ、後なぜ分かったかって言うと
明久は姫路のことを心配してる。だから、この設備を改善するだろ
う。その手は一つだけ。戦争で上をぶちのめして相手から奪うこと
だ。そして、雄二。彼は元々、小学生のころは神童とまで呼ばれる
ほどの輩だ。好戦的などころもあるし。この高校に来たのも専ら戦
争のためだと思うよ。と、ここまで条件が揃えば分かるだろう？」
と、僕は、今考えたことで誤魔化した。精神解読は易々と生徒にば
らしていいものじゃないしね。悪ければ、プライバシーの侵害にな
るし・・・

「そ、そうか。確かにそうじゃな。しかし、なぜお主はこのFクラ

スにおるのじゃ？そこまで、頭の回転がよければもつとよいクラスにいったはずじゃぞ？」

と、まあ、これもまた当然の質問が返ってくる。

「ああ、このクラスに興味があるんだ。おもしろいじゃないか？初日から戦争をする。バカばかりのクラス。これ以上ないくらいおもしろい。」

と、ちよつと本心をつた。もともと、僕は神（笑）によってこの世界に来たんだし。どうせ、神（笑）はここに入らないと文句を言つてまた、手紙とか送ってくるだろう。とか、思つてたけど。半分は面白いから入つてみたのだ。

「そうじゃな。ワシもこのクラスが好きじゃぞ。これからも仲良くしようではないか？」

と、秀吉が手を差し伸べる。

僕はその手を握り、答える。

「楽しませてくれないと困るんだよね。こっちは想いを寄せている人と一緒にいるチャンスまで棒に振つたんだから。」

「そ、そうなのか？おぬしもまたバカなのではないかの？」
と、秀吉が苦笑いしながら言う。

「ああ、そうかもな。僕もここにいる人たちと同じくらいバカなのかもね。これから、よろしくね秀吉。」

と、秀吉にも、優子にお見舞いした笑顔をお見舞いしてやる。
すると、

「ワ、ワシこそよろしくなのじゃ。／＼／＼」

と、顔を赤らめてこっちから視線をそらしてしまう。こ、これは秀

吉ルートが開拓できたのか！まあ、行かないけどな。俺は同性愛者じゃないんでね。

ガラッ

お、雄二と明久が帰ってきた。

じゃー、この後は雄二の代表スピーチか。うん、寝たいな。寝ようかな？いや、やっぱし、起きてようか。そうしよう。

雄二と明久に続いて先生も帰って来た。

「では、自己紹介の続きをお願いします。」

「えー、須川亮です。趣味は――」

と、雄二の前の人が終った。

「坂本君、君が自己紹介の最後の一人ですよ。」

「了解。」

と、雄二は答えて、壇上に上がっていく。

そして、一呼吸して――

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように読んでくれ。」

俺は雄二と呼ばせてもらうよ。つか、雄二に『代表』なんて、威厳のある呼び名あわない。（笑）

「さて、皆に一つ聞きたい。」

と、静かに聞く。教室すべてを確認しながら。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

皆も彼の視線を追っている。俺も追っている。空気を読んで。

「Aクラス冷暖房完備での上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おいて、静かに告げる。これから、起こる歴史的出来事の発端となった言葉を。

「――不満はないか？」

「『『『大ありじゃあつ！』『』『』』」

Fクラスの魂の叫びが聞こえた。この咆哮ともいえる叫びに立ち向かえるものなんて、この学園で鉄人しかないだろう。先生も少し腰抜かしてるし・・・

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

不満ならいくらでもわいてでるだろう。この教室に不満を持たない

ほうがおかしい。」

しかも、ここにはバカばかりだ。この教室にいるのが自分のせいだと考える人はいない・・・なんて残念な現状なんだ。

「みんなの意見はもつともだ。そこで」

「いやあ、これからが楽しみだな。ワク○（　　）○（　　）○（　　）○ワク

「これは代表としての提案だがー」

そう、じらすなよ雄二。早く言ってくれよ。俺はやる気満々だぜ。弱いけど。

「FクラスはAクラスにー」

まあ、明久よりは点数いいけど、明久は観察処分者だしな。

「『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う！」

自分なりに、楽しもうじゃないの？楽しまないと損でしょ！

そして、これから起こる暴動の引き金は引かれた。坂本雄二によって。

第2章↳引き金を引く、英語で『trigger』といます↳（後書き）

グダグダになってきた。主人公は秀吉にときめきません。主人公は基本明久たちとばかりをしますが、切り捨てるときは切り捨てます。

第2章　自信は大切だけど、過ぎるとそれは無謀になるのです（前書き）

毎度のことですが、短くてすみません。そして、そろそろバカテストを入れたいと思います。しかし、作者は笑いの才能も頭の才能もございません。とても、つまらない回答になると思います。どうか、お許しください。

第2章　自信は大切だけど、過ぎるとそれは無謀になるのです

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

などと、文句を言う生徒がでてくる。最後のはのぞいて。誰だよ、姫路に熱烈なラブコールしてるやつは。たく、姫路は明久のだったの・・・

まあ、確かに俺もFクラスがAクラスに勝てるなんて思ってたないし、実際勝たなかった。俺がどうするかでそれも変わるけど。

「そんな事はない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」
よ、雄二が宣言した。しかし、よく雄二はここまで自信気に物が言えるな。俺には絶対に真似できないね・・・

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろ』

『何の根拠があつてそんなことを』

確かに、どう考えても、常識的に俺たち最下層の生徒が三角形の頂点に君臨する生徒たちに勝てないのが当然だ。しかし、『諦めたら試合終了ですよ』の言葉を思い出せ！安西先生！！！！

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

雄二がそんな事を言うとかラスがすこしざわめく。

『ま、まさかオレか・・・』

『ようやく俺の出番みたいだな』

『いや、そんなことあるはずないだろ』

『そうだ、俺たちには大切な萌え要素の姫路さんがいるじゃないか
！』

などと、バカな言葉が交わされる。最後のはバカじゃないな、もう
すでに戯言だ。

「それを今から説明してやる。」

第2章└自信は大切だけど、過ぎるとそれは無謀になるのです┐

そして、彼は、順に、康太『ムツツリー二』、姫路、秀吉と説明し
ていく。

ここまでで、士気は最高潮まで達していた。

そこで、雄二が一言。

「それに、吉井明久もいる」

・・・シン――

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！まったくそ
んな必要ないよね！」

「ブハツ・・・」

やべ、おもしろくて吹いちゃった・・・もう、これはすでにいじめではないか？

「だ、誰だ今笑つて——」

誰だよいま笑ったのといおうと思ったんだろう。しかし、そのセリフは途中で中断された。

「だれだよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

と、言ったような言葉によって。まあ、当然だろう。バカなんて普通知れ渡らない。学校の不名誉だからな。

「ホラッ！せっかく上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを——つて、なんでぼくを睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

ははは、明久かわいそうだな。同情なんてしないけどさ。

「知らないのなら、教えてやろう——」

「や、やめて雄二！それだけは！——」

「コイツは、『観察処分者』だ。」

ああ、言っちゃったよ。明久が悔しそうな顔してる。

「それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で——」

「明久・・・さすがにそれは苦しいぞ・・・バカだからしょうがないけど・・・」

「そうだ。バカの代名詞だ。」

「肯定するな！バカ雄二！」

観察処分者とは、勉強ができなく、勉強意欲もなく、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分だ。具体的には、教師の雑用だ。前まで教師がやっていたんだが、最近は明久ができて教師も色々楽ができるようだ。」と、俺が説明してるうちに。雄二も姫路に説明を終えていた。俺は誰に説明してるかって？気にするな・・・

『けど、それって戦争で使えないやつが一人増えたってことだろ』
そう、観察処分者の召喚獣は、物体に触れることができるのだ。他の召喚獣は床としか物理干渉していない。しかし、その代わりなのか、フィードバックがある。召喚獣が攻撃されると本人も痛い。俺はなったことないから知らんけど。

「どうせ、いても戦力に入らないやつだ気にするな」

「雄二ひどいよ！そんな言い方ないじゃないか！」
と、明久が泣きじゃくる。

「じゃー、なんと言って欲しかったんだ？」

「やつは、怪我なんてしないから大丈夫だ、とか」
と、明久はさすがのバカだ。そんなこと万にひとつもありえない。

「そんなありえないこと言えるわけないだろ！」

「ありえないなんて、もつとひどい！」

「しょうがないだろ！お前がバカなんだから！」

と、明久と雄二のいがみ合いが始まる。ちよつと止めに入るか・・・

「あの、雄二。話を進めてくれ。眠くて、寝そうだと、わざとらしくあくびをする。」

「あ、ああ。すまなかつたな。とにかくだ！俺たちの力の証明として、まずDクラスを征服してみようと思う！」

「お前等、この境遇に不満はあるか！」

『あるともー！ー！！！！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおー！ーっ！？』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおー！ーっ！？』

「お、おー・・・」

と、姫路も可愛らしく、掛け声を言った。大丈夫かな？正直このノリは普通の人にはきついかも・・・ああ、忘れてた。彼女もふつうじゃないのか・・・

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらふ。無事大役を果たせ！」

ああ、この後の結果を知ってる俺としてはかわいそうに思うよ。しかし、これも原作のため・・・すまない明久僕は無力だ！

「……下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つていつてみる。」

いや、もう騙してるよ！

「本当に？」

と、ちよつと幼馴染に言われたら鼻血もののセリフを言う。おまえが言つてもうれしくねえよ！

「もちろんだ。俺を誰だと思つてる？」

君は、彼を騙そうとしてる悪人ですね。はい、そうです。

と、明久はちよつとまよっている。そこで、雄二がまた一押し。

「大丈夫。俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」
たぶん、彼にとって明久は友達じゃないんだろ・・・だから騙しても問題なしと・・・

「わかったよ。じゃー、僕が使者として行つてくるよ。」

「ああ、頼んだぞ。」

「ああ、頼まれた！」

と、言つて親指を立てて走つていった。

彼は死者として、逝ってしまった・・・

第2章　自信は大切だけど、過ぎるとそれは無謀になるのです（後書き）

いつも、読んでいただきありがとうございます。これからも、是非読んでください。

第2章　そろそろ開戦。。。の前に昼ごはんー！　（前書き）

なんだか、キャラの性格がわかりません。すいませんでした。文を書くのは下手なんです。

第2章　そろそろ開戦。。。の前に昼ごはん！

「騙されたあつ！」

まるで、猛獣にでも襲われた後かのように服がところどころ破れてる。たぶん、命がけで逃げてきたんだろう。

「やはりそうきたか」

まったく、悪びれていない。まあ、雄二だし、しょうがないか・・・

「やはりってなんだよ！やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

おお、怒った怒った。意味がないけど。

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ！」

と、更に明久が怒った。うるせえー。だまれよ。

よし、ここで投下だ！喰らえ明久！姫路&島田（慰めようではない）爆弾！

「姫路さん、今明久を慰めれば高感度アップかもよ。」

と、言ってあげると、初めて話しかけられたことに疑問を抱かずに、疾風のごとく明久の元へ。

「おい、島田。姫路が明久を慰めに行ったぞ？お前は行かなくていいのか？」

と、言ってやると。また、明久の元へ姫路を越えた疾風で駆け寄る。コイツ等人間か？まあ、島田が早いのは胸がない分だろう・・・この殺気！ハーン！

第2章　そろそろ開戦。。。の前に昼ごはん！

「吉井君、大丈夫ですか？」

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。」

と、姫路に心配されて、強がってる。あと、鼻の下を伸ばしていると

「吉井、本当に大丈夫？」

きたか。ふふふ。吉井、鼻の下を伸ばしたままだと！

「平気だよ。心配してくれてありがとう。」

ふつ、その答え方は間違っているぞ！

「そう、良かった・・・ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

実際に聞くと残酷だな。けど、これは島田の照れ隠しなんだよ。ツンデレだ！

「ああっ！もうだめ！死にそう！」

と、慌てて腕を押さえて転がりまわる。

明久、お前ってそこまで馬鹿なのか。もう、誤魔化せないぞ！

ざまあ、みやがれ！モテル男は世界の敵だ！

「そんなことどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

と、あきれた感じの雄二が言って、先にドアを開けて出て行く。

そうか、皆はこと後は屋上でランチか。皆は？俺が行くはずないだろ。昼は愛子と食べるよ。

「じゃあ、みんないつてらっさい。」
と、俺は別れの挨拶を。

「ん？お主は来ないのか？折角知り合えたんじゃし、もつと友好を深めようではないかの？」

と、秀吉が誘ってくれるが、俺には効かないぜ！誘う理由は、あれだろう。男としてみてくれるのは俺だけだからな。

「ああ、ごめんな。俺はもう先客がいるんでな。すまないよ。明久、開戦はいつなんだ？」

「えーと、午後からだよ。」

「そうか。じゃ、楽しめよ昼。」

そう言っつて、俺はメロンパンを彼に投げてあげる。

「それくらい食べとけよ。塩と水だけじゃなくて。」

と、最低限の優しさを彼にあげた。と、言っても明久にとっては大事な生命源カロリーなのだが。

後ろで明久が泣くのが聞こえる。

Aクラスに行きます

ガラッ

「愛子さんいますか？」

「・・・雪城、何をしにAクラスに？というより、なぜ雪城がAク

ラスじゃないの？」

と、霧島が忽然と目の前に現れる。

「僕はFクラスに行きたかったんだすよ。あと、愛子さんとお弁当食べに来ました。」

「・・・なぜFクラスに？愛子はここにいるのに。」

「聞かないでください。」

霧島は苦手だ。会話がもたない。まったく、雄二も苦労するだろうな。

「あれ？孝平君、なにしてるの？もしかして、ボクとお弁当に食べにきてくれたの？」

「ああ、そうだよ。Fクラスに知り合いはいないからね。」

「Fクラスの人はどこで食べてるの？」

「なんで、そんな事を聞くんですか？」

「どこで食べてるの？」

「屋上ですけど・・・ま、まさか！」

「オッケー」ボクたちも屋上に食べに行くよ」

「そ、それはやめてください！」

やばい！そんなことしたら明日俺がFFF団に殺されるぞ！

「問答無用」

と、言って愛子が俺のことを引きずっていく。

屋上の扉の前

ふうー、痛かった。愛子のやつずっと引きずるんだから。階段は痛かったね。

と、屋上に着いたぞ。ちょっと、タイミングを見計らっていくか。一応ミーティングなんだし。Aクラスに聞かれたくないだろう。

SIDE 明久

いやあー、姫路さんにお弁当を作って貰う約束をした。うれしいぜ！

「それにしても、孝平の言っておった『先客』が気になるのう・・・
想いを寄せてる相手もおると言っておったし。」

と、秀吉が言った。確かに、気になるな。あんなに優しい孝平に彼女がいらないのだろうか？

「なに？孝平がどんなことを言ったのか？」

そっか、雄二は先に行ってたから聞いてなかったのか。

「うむ。先客がいるからワシ等とは食べぬと。」

「そうか。うーん、誰だろうな？俺もアイツのことは全然知らないんだが。誰か知ってるやつはいないか？」

と、雄二が僕のことをみてる。

「僕が知ってるはずないだろ。」

「しかし、なぜ孝平はお主が塩と水で生きておると知っておったのじゃ？」

「うーん、分らないな。」

うーん、たしかにそれは疑問だな。僕はそこまで自分の食生活を人に明かしてないのに・・・

ガチャ

「ひどいなー明久。僕のこと覚えていないのか？」
と、孝平がドアのほうにいた。

SIDE OUT

「ひどいなー明久。僕のこと覚えていないのか？」
まあ、明久はバカだから覚えてないだろうな・・・

「ほら、三学期の始まった頃にさ。明久が僕にばかされたのをシヨツクに受けて泣いて走ってったじゃないか。」
ここまで、言えばわかるだろう。コイツが毎回泣いてなければ。

「三学期の始めにバカにされる・・・」
明久が思い返してるらしい

「って、お前はいつもバカにされてるじゃないか。」
と、雄二がからかう。

「そんなに、言われてないよ！うん・・・あ！あのときの失礼な人か！僕の顔に『塩と水』って書いてあるって言った！」
思い出したらしい。

「ああ、そのときの僕だよ。」

「なんだ、明久お前知り合いだったのか？」

「知り合いなんかじゃないよ。一回バカにされただけだよ。」

「まあ、お前を一回しか馬鹿にしてないやつは少ないだろうから覚えられるか・・・」

「雄二いま、ひどいこといったよね！まるで、僕を何回もバカにする人のほうが多いみたいな言い方！」

「そう言ったんだが？」

と、また雄二と明久の言い争いが始まる。

「ねえ、孝平君。この人たちは？」

「ああ、この人たちが僕のクラスメイトだよ。言い争ってる赤い方が雄二、バカな方が明久。あそこの、青いのが康太。女っぽいのが秀吉。あとは、ピンクが姫路さんで、pet——スレンダーなのが島田さん。」

やべえー！思わずペツタンコとか言いかけてしまった！島田から殺気が！

「へえー。ボクは工藤愛子だよ♪Aクラスで得意教科は保健体育。」

「……俺の敵じゃない」
と、康太が言う。

「もしかして、君がムツツリー二君？残念だけど、ボクは理論派じゃないくて——実技派なんだよね。」

と、愛子が言うのと、雄二、明久と康太が同時に反応する。言うまでもないが、そのあと明久は島田によって可愛がられた。

「愛子さん、そういうのは自慢げに言うことじゃないし。実技といつても何もしてるところ見たことも聞いたこともないんだけど。」

「ああ、ひどいなー孝平君。じゃ、今日見せてあげようか？家に帰ったら一緒に実技の練習とか。」

後ろで明久が『なんて羨ましい！』とか言っつて島田に締め上げられてる。

「嫌だよ、今日は疲れるから。言っただろう、この後戦争をするんだ。」

「そっかぁー、残念。じゃ、——」

「やめとくよ。」

「むー、まだ何も言ってないんだけどボク。」

「言うことは分かってる。どうせ、明日とか明後日とか言うんだろう？残念だけど、明日も明後日も戦争だとおもうよ。」

と、雄二のことを見ると、『こいつ分かってるじゃないか』と思っ
ている。

「違うよぉ」ボクは――」

ち、違うのか？なにニヤニヤしてるんだよ。

「今ここではない？って言おうと思ったんだけどなぁ」
なつ、なんだと！

「み、みんないるだろう！疲れてないからって――しまった。」
やってしまったぁー！！

「じゃ、皆がいなくてつかれてなかったらしてくれるんだ」うれし
いな。」

「なつ、ちよつと待て！明久と康太！お前等はしをこっちに向ける
な！それは案外危ないぞって聞いてない！」

「裏切り者は排除！」

と、二人で意気投合して突っ込んでくる。

そして、その後ちよつともめていると。

「もう、やめてくれお前等。この後戦争をするんだ。その前に怪我
をしてどうする。」

と、言ってようやく引いてくれた。

「ふう。やっと飯にありつける。」

と、言って俺は飯を食べ始めた。

「やっぱし、いつ見ても公平君のお弁当は美味しそうだな」
と、愛子が横から見てくる。それにつられて、他の皆も覗いてくる。

そんなに、見られると食べにくいんだが。

『私も、負けません』 姫路

『やっぱし、料理はできないと・・・』 島田

『いいなあ』 明久

『・・・俺も負けない』 康太

『よく、できるな』 雄二

「じゃー、愛子さんのも作ってこようか？」

「本当！じゃー、明日作ってきてよ！」

「わかったよ。けど、期待しないでね。」
と、言っている。

「裏切り者は排除！」
と、言ってもたしても、二人が突っ込んでくる。

キーン、コーン、カーン、コーン

「ほら、お前等行くぞ！そこ！争ってるんじゃない！」

「・・・今回は救われたと思え。」

「次はないからね。」

「それは、お前がいえるのか明久？お前も十分標的になると思うんだが・・・」

「コイツはバカだから。気付いていないんだ・・・」
と、雄二が補足説明ありがとう。

「ああ、そうだったな・・・」

「え。なに二人ともなにか哀れなものを見るような目で！なんなんだよ。」

「おし、じゃー、行くか。遅れたら怒られるした。」

「そうだな。」

「なんなんだよおおおおお！！」
明久うるさい！

「あはは、このクラスおもしろいな。」

そして、僕たちの戦争は始まった。

第2章 Dクラス戦、今回は題名が普通（前書き）

今日はめずらしく一日に2回更新しました。感想をいただきました。とてもうれしかったです。ありがとうございます。これからも是非読んでください。あと、時々主意じんごうの口調がおかしくなりますが。怒ったときは口調が元に戻ります。それ以外だと、作者の間違いで。

第2章 Dクラス戦、今回は題名が普通

「この意気地なし！」

「目が、目があっ！」

む、ム。力大佐！ま、間違えた、明久！島田に目潰しされた。まあ、いきなり総員退避なんてね。

い、いや、しかし、あの鉄人を見たらどんなやつでも怖がるか。

「おい、横田。こっちこい。もし、明久が逃げようとしたらここによごによごによごと言え。分かったか？」
と、雄二が横田を使って明久に伝言を残している。

「ああ、分かった。今から言ってくるよ。」

と、言って横田が走っていく。まあ、アイツが後退し始めるのも時間の問題だろう。

第2章 Dクラス戦、今回は題名が普通

俺たちは今戦争中だ。

そして、俺の位置は雄二を守る近衛隊になっている。なんで、俺が近衛隊にはいつてるんだろう？

「ねえ、雄二なんで僕が近衛隊に入ってるんだ？腕には自信がないんだけど。」

と、雄二に直接聞いてみると、

「お前は頭の回転が結構速いからな。俺のそばで参考にできる考えが欲しかったんだ。」

「そっか。」

「明久たちには勤まらない役目だからな。お前しかいないんだよ適役が。すまないな、お前も前線で戦いだろうに。」

と、雄二が俺を気遣ってくれている。コイツも根はいいやつなんだな。いや、明久にだけひどいやつなんだな。

「別にかまわないよ。前線の楽しみもあれば後方での楽しみもあると思うし。こっちのほうがスリルがある。」

と、言ってみたものの、俺としてはどこにいてもいい。どちらかと言うと今の待遇のほうがいい。目立ちたくないからねAクラス戦までは。

「ねえ、雄二？」

と、そうだ。Aクラス戦ででたいんだよな。膳は急げだ。

「なんだ？」

「雄二はAクラス戦を一騎打ちにしようとしてるだろう？」

「ほう、よく分かってるじゃないか。やっぱし、お前をそばに置いてよかったよ。で？」

まあ、俺は頭が回ってるんじゃないくて、知ってるんだけどな。

「相手はその意見を飲むけど、5対5の団体戦にしてくると思う。」

「なんで、そう思うんだ？」

「ああ。まあ、相手が君だけに、雄二が出ると言っても騙して姫路

を出すとも思っただろう。」

「まあ、それも考えていたが。」

「そこでだ、僕をその団体戦の選手として出して欲しい。」

「それを何で今言っただ？もつと後に言えばよかっただろう？」

「早く予約してきたかったんだ。それで、それは頼めるかな？」

「ああ、いいぞ。そういう場面になったらな。」

「ありがとう雄二。恩に着るよ。」

よし、このことはもうオーケーだ。えーと、そろそろ島田が襲われた気がする。助けに行くか。島田に貸しを作るのもいいかもしれない。

「雄二、ちょっと出かけてくる。すぐ戻ってくるけど、気をつけてよ。君は僕たちの大将なんだからだね。」

「ああ、分かった、お前も気をつけろよ。」

——移動中——

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドが空いていますからね。」

「よ、吉井、早くフォローを！なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

「殺します……………。美春とお姉さまの邪魔をする人は、全

員殺します……。」

「島田さん、君の事は忘れない！」

「ああつ！吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！」

と、間に合ったみたいだ。ちなみに、原作だと須川が来るが、俺が須川に別の命令を与えているのでこない。

「そうだよ！明久！君は彼女を失ってもいいのか？」

「え？こ、孝平！？」

そして、俺は人生初めての召喚をする。

「試験召喚！サモン」

その掛け声で床に幾何学的な紋章が浮かび上がり。そこから小さい人型の物が出てくる。

下は質素な灰色のジャージ、何気にメーカーのところにN i k o 。
って書いてある。

上は白のタンクトップ、これも何気にメーカーがA d d i o a s つ
て書いてある。

そして、武器はなんか途中で曲がった鉄板、もとい、ブーメランの
ようだ。ブーメランが鉄ってどうなんだろう？まあ、その分切れ味
がいいとかだろう。

「なっ、邪魔をするなっ！」

と、さつき美春と名乗った少女が突然現れた俺に驚いている。そし
て、俺は一思いに、ブーメランを投げるのではなく、そのまま持ち
彼女の召喚獣の首を切り裂く。そして、その召喚獣が消える。

これが、明久の召喚獣だったら痛がるだろうな。そして、点数が浮
かんでくる。

Fクラス 雪城孝平 V S Dクラス 清水美春
化学 165点 0点

と、まあ、こんな感じだ。まあ、本気出してないけどね。最初から本気なんてださないよ。能ある鷹は爪を隠すってね。

「西村先生！早くこの人を連れて行ってください！危ないです！」

「お姉さま！お姉さま！おのれ、貴様雪城孝平！覚えてなさい！絶対殺します！殺します！ついでに、その豚も！」

「僕だけ豚呼ばわりなの！！」

『戦死者は補習室に集合！！』

「嫌です！やめてください！私はお姉さまと！あああああ！！」
そして、やっと危機はさった。明久以外は。

「吉井」

「島田さんお疲れ。とりあえず一度戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「さ、須川君、行こう。戦争はまだまだこれからだ。」

「吉井いつ！」

「は、はいつつ」

「・・・・・・・・・・ウチを見捨てたわね？」

「・・・・・・・・・・記憶にございません」

こいつ、あくまで黙秘する気か！

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

そして、島田が爆発しかけたところに俺が突入。明久今回は助けてやるよ！お前等には幸せになって欲しいしな。

「まあ、島田さん。今回の明久は許してくれないかな？」

「え？孝平！助けてくれるの！」

「な、なんでよ！コイツはウチを見捨てたのよ！仲間を見捨てるなんて！」

「まあ、仲間を見捨てるのに反対じゃないよ」

「なんでよ？見捨てるのは悪いことでしょ」

「いや、そっちのほうがいい時だってあるよ。時と場合を選ぶんだ。まあ、今さっきの明久はだめだね。それは言えるよ。」

「こ、孝平！僕を助けてくれるの？」

「まあ、それでもだ！男には恐怖するものがいくつかあるんだ。」

「なによそれ？」

「その中の一つに『女』が入ってるんだ。怒った女は男でも止められないんだ。これは恐怖だよ。」

「そ、そうなんだよ。いつもの島田さんとか。」

「明久！少し黙ってください！それで、今さっきの清水さんはとても怖かったのです。男からしたらそれはもう鉄人なんかより怖かったです。」

「そ、そうなの？」

「そうです。島田さんみたいなおしとやかでかわいい女の子はとも大歓迎なんですけど、清水さんみたいな、とち狂った女の子は男の天敵なんです。だから、明久を許してください。」

「かわいいなんて／＼／＼で、でも、雪城は倒してたじゃない」

「それは、僕が完全な第3者で突然の攻撃で、彼女の点数が減ったからです。しかも、僕には召喚獣がやられても補習しかありませんが、明久にはフィードバックがあるんです。迂闊に戦って痛がりたくなかったんでしょう。だから、今回は僕に免じて明久を許してください。」

「そ、そうね。吉井、今回は許してあげるわ。」

「ありがとう、孝平！」

「感謝する相手が違うでしょ！」

「そうだよ、明久。そんな事言うからいつも島田さんがやきもち焼いて暴力振るんだよ。」

「なっ、何言ってるの雪城！そんなことないわよ！」

「やきもち？なにそれ？食べ物？カロリーはあるの！」
コイツの頭はカロリーしか求めてないのか・・・

「まあ、それは置いて。島田さんはまず、教室に戻ろう。化学のテストを受けてもう一回出陣して欲しい。明久は須川君と一緒に秀吉たちが補給してる間、前線を維持してほしい。」
そういつて、2人、2人で別々の方向に走っていく。

これからが正念場だからね。皆にはがんばってもらわないと・・・
・・・

と、当然俺もがんばるよ！・・・たぶん、きっと・・・

第2章 Dクラス戦、今回は題名が普通（後書き）

誤字脱字があるかもしれません。すみません。

第2章ゝガン。ールヴ討伐完了、1分後に本部に戻りますゝ（前書き）

タイトルはネタです。そして、今回は展開が速いかもしれません。
許してください。友達から話が進まないと言われて、今回でDク
ラ戦を終らせたかったです。

第2章　ガン。ールヴ討伐完了、1分後に本部に戻ります」

俺と島田が教室に帰り、島田が回復試験をうけている。
そんなところに、須川が帰ってきた。

「ん？須川お前どうした？前線にいるはずじゃないか？」
と、雄二が聞く。

「ああ、吉井隊長から教師陣に偽情報を流せと言われてね。」

「ほお、あいつにしてはいい考えじゃないか。じゃ、ごによごによごによごによ、と放送で流せ。」

「ほう、それはいい案だな。しかし、いいのか？絶対成功するが、吉井隊長が・・・」

「大丈夫だ、あいつなら生きて帰ってくる。」

「分かった！じゃあ、いつてくる。」
と、言って須川は去っていった。

第2章　ガン。ールヴ討伐完了、1分後に本部に戻ります」

須川が去っていったから5分ほどたってから。

ピンポンパーンポン 『連絡します』

須川の声が流れた。

『船越先生、船越先生』

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話だぞうです』

「ブハッ」

やべ、吹くわ。明久ご愁傷様。

船越女史。婚期を逃し、今では単位を盾に生徒に交際を迫るような教師だ。

「吉井のやつう！まさか、年増が好きだったの！」

いや、それはないよ島田。アイツは姫路が好きだぞ。ドンマイ！

「大丈夫だよ島田さん。これは作戦のうちだから。」

「そ、そうよね。作戦なんだから。吉井が年増が好きなわけないわよね。」

と、自己暗示している。そこまで、ゾッコンかよ。

『須川あああああ！！！！！』

あ、明久の恨みのこもった咆哮が聞こえる。

「雄二大丈夫なの？本当に明久が食べられるかもよ？」

「大丈夫だ。アイツの家の近くに独身の男性がいる。そいつを紹介

すれば済む。まあ、明久がそれに気付けばいいが・・・」
ああ、そんな人がいたな。かわいそうに田中さん（仮）。

「そろそろ、時間だな。行くぞお前等！」

「アイアイサー」

そして、教室を後にした。

SIDE 明久

くっ、もうもたない。もう、あの策を使うしかないのか！使いたく
なかったけど。

この後、須川君を殺すには補修室行きを免れないと。しかたない！
雄二の援軍ももうちょつとで来るんだ！持ちこたえる僕！

「ああ！霧島さんのスカートが捲かれてる！」

『なにー！！』

と、言っと、なんと男子は当然だけど、女子も多数が振り返る。

近くの窓に思いっきり上履きを投げる。

ガシャアアン！！

『な、なんだ！？なにごとだ！！』

くっくっく。相手が混乱してるぞ。さすが僕！天才だ！
ここからが、作戦実行だ。

「うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！」

もう、ここを生き抜くにはこれしかないんだ！
そして、消火器の安全弁を引き抜く。

プシャアアッ！！

『う、うわっ！なんだ！？』

『ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねえか！』

『前が見えない！』

消火器の粉が視界を覆う。

そして、これが極めつけだ！

「島田さん、キミはなんてことを！！」

これで、みんなこれが島田さんがやったって思うだろう。

『Fクラスの島田め！なんて卑怯なやつなんだ！』

『許せねえ！彼女にしたくないランキングに載せてやるからな！』

『そうだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！』

僕、生きていられるかな。死にそんな予感が！

『…………でも、男らしくてステキ…………。お姉さま…………』

島田さんが危ない！ていうか、清水さん補修は！

そして、最後に視界をフリーにするために。手にある消火器を天井のスプリングクーラーに向けてぶん投げる。

「だあああっ！」

上手く命中したぞ。

シュワァー

そして、水滴が粉を落とし始める。

SIDE OUT

「またせたな、吉井！五十嵐先生！Fクラス、近藤吉宗が行きます！」

「試験召喚！」

Dクラス 中野健太

vs

Fクラス 近藤吉宗

化学 43点

91点

そして、明久の危機は救われたかのように思えたが・・・まだ2つほど危機が残ってる。

1つ、船越先生、2つ、島田。ざまあ！！

その後、いざこざがあり、明久が雄二を殺そうとしたが、雄二の『あ、船越先生だ』の一声で未遂に終わった。

「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

『そっちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！』

『なら、俺は古典勝負を——』

『日本史で——』

ああ、一人によってたかって。可愛いそーだな。まあ、戦争だからしょうがないか。

『Dクラス塚本、討ち取つたり!!』

みんなも、この波に乗り倒しまくれえー！おし、俺も行くか！

「その田中君（仮）、Fクラス雪城孝平が化学勝負を申し込みます。」

「た、田中じゃない！田代光輝だ！だが、受けてたつ！」

「試験召喚！」

Fクラス	雪城孝平	VS	Dクラス	田代光輝
化学	165点			90点

余裕で俺の勝ちだな。

相手の装備は武者にランスだ。なんて不似合いな！

俺は、ブーメランを投げた。しかし、相手がそれをランスではじいた。って、今思ったら俺の武器ブーメランだけ！やべえ、どうしよう！とか思ってたら腰にもう一個ブーメランがついている。なんだ、驚かすなよ。

そして、もう一度投擲する。しかし、田中（仮）をはずれ後ろのほうに飛んでいく。

グサッ

『ぎゃあーーーー！！！！』

偶然後ろのほうで戦っていた近衛隊の一人の頭に突き刺さる。それと、同時にどこからか熱戦が飛んできて田中（仮）にあたって、死んでいる。そろそろ田代って呼んでやるか。あ、もう死んでるじゃん。

その方向を見ると、姫路さんの召喚獣がいる。そして、相手のDクラスの平賀源二の召喚獣はもう跡形もない。

『うおおーーーー！！！！』

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳とちやぶ台ともおさらばだ！』
残念、それはかなわないよ。

『坂本雄二サマサマだな！』

とか色々聞こえてくる。

『姫路さん愛してる！』

は、聞こえなかったことにしといたけど。

ああ、このあと何もなかったよな。うん、先に帰ろう！はやく愛子に会いたいし！

じゃあな、みんな、俺は一足先に帰ってるよ！

SIDE 雄二

終戦から少し経ってから。

「明久、ゲームばかりしてないで、寝る前に少くらしい勉強もしておけよ。それにしても？」

「どうしたの？」

「孝平はどこに行ったんだ？最後の方の説明をしなくてよかったのだろうか？」

まあ、アイツなら分かってると思うけど。

「ああ、孝平なら皆が叫んでる間に帰ったのを見たよ。今日ちょっとは活躍してたのね。近衛隊も一人倒してたし。」

「ああ、そうだな。まあ、いい。お前は勉強しとけよ。」

「はいはい。寝る前に教科書くらいは読んで——ん？」

SIDE OUT

変なところで切ってる？知らないねそんなこと！

俺は今Aクラスに向かっている途中だ。まったく、あいつ等のノリには着いてけないよ。ここまで、叫び声（主に明久の叫び声）が聞こえるよ。

お、Aクラスに着いたぞ。

「おじゃましまーす。愛子さんいますか？」

と、ドアをあけて入ると。

「いるよっ」

と、ドアの目の前に愛子が立っていた。こいつ、謀ったな！

「びつくりした？」

「ああ、びつくりしたよ。それじゃ、帰ろうか？」

「うん」ずっと待ってたんだからね。」

「ごめんね。僕のクラス初日から戦争して勝ったから。この後も続きそうで。」

「それにしては。早くない？」

「うん、抜けてきたよ。愛子さんを待たせると悪いからね。」
と、言って手を差し伸べる。もちろん笑顔で。

「あ、ありがと／＼／＼／」

と、愛子がごによごによ言っている。

『あいつ、殺す！』

『モテル男には死を！』

『僕も吉井君にあんなことを……』

なんて、心の声が聞こえてくる。ここも、Fクラスと大差ないかも。男のレベルは。女のレベルは高いけど。

「愛子も帰るの？一緒にどこか食べに行かない？」

と、愛子を誘っているのは木下優子だ。秀吉にしか見えない。

「え……どうする孝平君？孝平君も来てくれるんなら行くけど。」
と、愛子が俺の同行を求めている。ここは、男としていくしかないだろう。

「僕も行ってもいいよ。」

「じゃあ、今から行きましょう。」

「どこに行くの優子？」

「ええ、ここの近くのここ前できた喫茶店をチェックしようと思つて。」

「え……」

そ、そこは、俺が春休みバイトしてた。って、だめだ、行きたくない！

「どうしたの？孝平君。」

「よし、決定ね！行くわよ愛子とその彼氏！」

「彼氏じゃないです！そんなこと言つのは愛子さんに失礼ですよ。」
と、ちよつと礼儀っぽく行つてみたもの。愛子が 真っ赤になつてのを見ると、なんだかこつちまで照れるじゃないですか。

『なっ！彼氏だと！』

『ま、まさか木下優子まで手にかけていたのか!~!』

『絶対殺す!』

など、心の声じゃなく、心の叫びが聞こえてきた。ここはやばい! 早く行かないと!

「よし、じゃー、行こう! 早く行こう!」(汗)

「え、うん、行こっか」

「ええ、早く行きましょう」

と、行つて早々とAクラスを退散した。

Aクラスにはもう来れないかも……………来るけど……………

第2章へガン。ールヴ討伐完了、1分後に本部に戻ります（後書き）

今回は本編ではなく、この後の喫茶店の話にします。こういった外伝がある場合は、その前の話でお知らせします。これからも読んでください。次回の次からバカテストを入れたいと思います。

外伝『愛子と優子と喫茶店』（前書き）

すいません。前回、今回はバカテストをやると言っていたのですが。今回は外伝だったので、入れないことにしました。しかし、次こそは絶対バカテストとをいれます。今後も読んでください！

外伝 愛子と優子と喫茶店

さあ、ここで質問、俺は今どこに向かっているでしょう？

答え：学校の近くの新設の喫茶店

誰と行ってるでしょう？

答え：愛子と木下優子

どういってるでしょう？

答え：引きずられている

外伝 愛子と優子と喫茶店

最後のが明らかにおかしい・・・
どう考えてもおかしいだろ！

まあ、それは置いといて。

今向かっているのは、喫茶店『Delizioso』イタリア語で
「美味しい」という意味なのだが・・・

喫茶店自体はイタリアと一切関係ない。イタリアのイの字もない。
そして、そこは・・・俺が春休みにバイトをしていた店だ。

あの後（前回参照）早々とAクラスを立ち去ったかと思うと、なぜか、Aクラス男子 + α が俺を追いかけてくるので、それをまくのに時間がかった。

α っていうと、他のクラスの男子だ。どこから、聞きつけてきたのか。なんて、地獄耳だよ・・・当然Fクラスはあの黒い覆面をかぶり全員が追いかけてきた。

正直、今は良く生きていると思っている。

「大丈夫、孝平君？」

おお、愛子は俺のことを心配してくれる唯一の人だよ。俺は感動したよ。

「自業自得でしょ。」

お前が誘っておいて何を言うか！彼女は、木下秀吉のそっくりさんで双子の姉の木下優子。

「言うておくけど、私が誘ったのは愛子だから。」

へ、屁理屈だ！

「ま、とにかく行くわよ。」

そして、5、6分歩いたところに、なんの変わったところもない喫茶店が見えてくる。

外見は他の喫茶店と変わらないつくりで、窓は大きいのが一つあり、そこから店内が見える。

そして、優子が喫茶店のドアを開けるとカラン、カランと音が鳴る。

「中もあんまり変わらないわね。」

優子はなにかを期待していたようだが、残念だったな！

「ホントだね。ここって、本当においしいの？」

愛子、それはバカな質問だな。ここは美味しさに決まっているだろ！なにせ、この俺がバイトをしていたんだからな！

そして、適当な席に着く。

「ご注文は、何にしますか？」

と、一人の店員が注文をとりに来る。

それに、対応する3人。お、見せ掛け2人。

「私はアイスコーヒー。」

アイスコーヒーか・・・コーヒーのほうが好きかな・・・

「ボクはショートケーキで。」

いきなり、スイーツかよ。そう急がなくても、今日は暇なんだし・・・

「あの？お客様は？・・・って、孝平君じゃないですか？何をしてるんですか？」

ふっ、やっと思い付いたか・・・

「あのね？僕が何をしにきたかって聞くのはとてもあほらしいと思うよ？喫茶店に何をしに来ると思う、普通は？」

「あなたの場合『働く』、『働く』、『働く』の三択ですね。」
って、それは三択じゃなく、一択だ！

「そうだね、じゃー、今日も働くでしょうか——じゃなくて！そこ普通は『食べる』、『飲む』、『くつろぐ』とかだろ！なんで全部『働く』になるんだよ！」

と、ちょっと付き合ってた。

「あのー？孝平君、この人誰？」

と、会話に割り込んできたのは愛子。まあ、俺の春休みなんて誰も知らないよな。

「ああ、この人はここでウェイトレスやってる「堀河杏ほりかわ あんずです」だそうだ。」

勝手に俺のセリフに割り込みやがって、このやろっ！やろっじゃないけどな！

「で、なんでその杏さんと孝平君が友達なのかな？」

「わ、私もそれ気になる。」

と、今まで空気だった優子が会話に入ってきた。お帰り優子ww

「ここ喫茶店『Delizioso』は僕が春休みの間にバイトをしていた店だからです。」
と、正直に話す。

「え？バイトしてたの？」

異口同音だな。ふう、コイツ等は俺をバカにしてるのか？

「僕だって仕送りがあるからって自分で稼がないわけじゃないんです。緊急で金が必要な時だってあるんですよ。」

「本当にびっくりしたよ、だってね、店に入ってきていきなり『俺をここで一ヶ月雇ってくれ！』って言うんだよ？うちでは普通バイトなんて雇わないのに。」

と、そのときの状況を説明してくれる杏。知らない情報与えんてい

いよ・・・

「じゃー、なんで雇ったんですか？バイトは雇わないって・・・」
と、当然の如く優子が質問した。

「いやぁー、彼があまりにも使える人でね・・・」
と、頬を軽く搔きながら答える杏。

「まさか、料理、接客、後片付け、会計まで全部の仕事ができるなんて思わなかったんだよ。」
と、どう『あまりにも使えるのか』を説明してくれる。

「孝平君ってそんなにすごい人だったんだ・・・」
と、見たことのない幼馴染の一面を見て驚く愛子。

「まあ、そのときは非常に金に困っててね・・・どんな手段をとっても金が必要だったんだ。」

と、あのときをの事情を説明する俺。

「なにがあつたの、孝平君？」

「いやぁー、親戚のおじさんがさ、仕送りを送るの忘れてて。あやうく、明久みたいに毎日が水と塩の生活になるところだったんだ。そこで、急いで親切で人手が必要だと思ったこの喫茶店で雇ってもらおうと思って来たんだ。」

「いやぁー、あの時はちよつとピンチだったね。明久はすごいよ・・・これだったら、姫路の弁当でも真つ先に飛びつくね。」

「そ、それって相当やばかったんじゃないの？」
と、ちよつとうろたえている優子が、なにか生暖かい視線を送って

くる。やめて、そんな目！

「あ、ああ。けど、その事情を話したら店長がバイト代弾んでくれ
てね。春休みの間、半分以上はこの喫茶店にいたよ。」
ちなみに、店長はただの人です。本編にはでてきません。

「そうねえー、あの時は本当に役に立ったわ。また、来ない？なん
なら、今だったらお姉さんが付き合ってあげるっていう特典も付け
とくけど。」

と、からかうように杏が子供のように、誘ってくる。（怪しい意味
ではないです）あ、子供のようにじゃなくて、子供だな。

「今何か失礼なこと考えてなかった？」

こいつ、俺の心が読めるのか！？

「ああ、考えていたよ。あ、そうそう、杏さんの歳って、むぐっ！」

「からかつて悪かったわ・・・だからそれだけは言わないでちょう
だい・・・」

と、OTLみたいな状態に入ってしまう杏さん。ご愁傷様。

「分かれればいいんです、分かれば。あと、またバイトには来ます。
色々とやることが終わったら。」

と、本音を言っておく。まあ、1週間くらい後だろうか？戦争が終
つたらかな？

「ほ、本当！？店長も喜ぶわよ！」

「こ、孝平君そんなに杏さんと付き合いたかったの？」

な、俺の目にはお前しか見えないよ！っと、それはいいすぎだな。

「な、なはずないだろ！こんな年増と！」

あ・・・やべ・・・ヾ(；´∩｀)、A、アセアセ

「孝平君・・・今なんて言った？『年増』とか聞こえたんだけど？私の聞き間違えかな？」

あわわわ。やばい、なにか黒いオーラを纏っているよ。

『杏ちゃーん、お客さんだよー！』

店長ありがとう！アンタは神だ！あの神（笑）以上に神だ！

「はぁーい、今行きまーす！（次あったらクロス）」
まじ、目が怖いです・・・ガクブルガクブル・・・

「じゃ、じゃー、俺帰るな・・・俺幸いなにも頼んでないし・・・」
と、本気でもう帰りたくなってきた・・・

「え、もう帰っちゃうの幸平君？もうちょっと居ようよ？」
お、俺の命がどうなってもいいのか！

「お、俺は次見つかったら殺されるんだ・・・あと、これ御代ね。今回は俺が奢っとくよ・・・じゃ。」

と、俺は猛ダッシュで店を出た。

「あ・・・行っちゃったね」

「うん、行っちゃったわね」

と、喫茶店には優子と愛子が残された。

「て、言うか！この御代100円足りないじゃい！！！」

か、金がなかったんだよ！

後の杏さん

「くそっ、逃げられたか・・・しかし、次あったらお前の最後だと思え・・・ふふふ」

と、不気味に笑っていたとか何とか。まあ、別の話ですね。はい、別の話です。

外伝『愛子と優子と喫茶店』（後書き）

ちよつと、更新が遅れました。すいません、これでも最善はつくしています。一人称が俺になることが多々あります。これは、作者のまちがえです。すみません。

第2章　恐怖の弁当！？（前書き）

なかなか、話が進みません。はやく合宿編が書きたいです。

第2章↳恐怖の弁当！??

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても

雪城公平の答え

『問題点・・・・・・・・なべの中が空だった。
合金の例・・・・・・・・オリハルコン』

教師のコメント

それは、問題ではありますが、問題ではありません。君の吉井君と同じような答えだすね。すこし、びっくりです・・・

まったく、昨日はひどい目にあつたよ・・・あの男どもに殺されるなんて屈辱的過ぎて必死に逃げたけど。
それにしても、杏さんも相当怒ってたな・・・俺って生きていられるのかな？

第2章└恐怖の弁当!??┐

今日は、朝からずっと回復試験らしいが、俺ってなにも喰らってないからなあー、受けなくていいんじゃないかな？

「ねえ、雄二？僕たちBクラスに勝てるかな？いまさらだけど、不安なんだけど。」

「勝てるさ、当然だろう？まあ、お前が本気の点数を取ってくれば済む話なんだが・・・取る気はないだろう？」

「うん、取る気はないよ。本気はAクラス戦の時に見せるって約束じゃないか？（してないけどね！）」

「してないよな、よんな約束。」

ガラッ

おっ、明久じゃないか。ああ、可愛いそうに。ざm・・・じゃなくて、ご愁傷様。

おっ、早速島田が向かっていったぞ。やっちまええー！

「吉井いつ！」

島田が明久にパンチをかましてる。明久耐えろ・・・自業自得だからな！ああ、けど、そろそろやめないと、明久がそっちに目覚めてしまうかもな。

「じふあっ！」

おおー、吹っ飛んだ。人間とは思えない力だな。恋する乙女の力は何倍だ？

「し、島田さん、おはよう・・・ガクッ・・・」

明久が明らかに白目をむいている。気絶してるんじゃないか？吉井のHP5！

「おはようじゃないわよ！」

そんな、明久をお構いなしにグワングワン揺らす島田。吉井のHP 0！かわいいそー。ちよっと、助け舟をやるか。

「島田さん、そろそろやめないと・・・明久が・・・泡吹いて気持ちわるい・・・」

と、明久を見ると泡を吹いている。さすがにやばかったんだろう・・・

「で、でも！吉井の所為で彼女にたくないランキングが上がっちゃったのよ！」

かわいそーに。ここは男として慰めるべきかな。怪しい意味じゃにですよ。

「大丈夫だよ島田さん。島田さんはその性格を直せば、スレンダーで足も長いし、顔も整ってとっても綺麗なんだから。性格さえ直せばそんなランキングからぬけるよ。僕が保障するから。」

「そ、そうかしら？そんなに褒められたのは・・・はじめてかも」
ふっ、これが俺の対島田最終兵器『褒めたおす』だ！

「そうだよ、なんだったら性格を直すのは僕が手伝ってあげるよ。そうなったら、どんな男でもいちころだよ。」

あ、あと一押しだ。

「吉井も？」

「明久なんて簡単すぎるくらいだよ。」
と、親指をグツとたてる。

「そ、そうね・・・って、大丈夫かしら？」

暴走状態から治まると吉井のことを心配したす島田。コイツは二重人格とかじゃないよな。

「自分でやっておいて、心配するんだ。けど、心配は無用だよ。明久の生命力はゴキブリ並だから。いや、はるかに凌駕してるよ。」

まあ、塩と水で生きてけるんだ。人間としては最強のレベルだろう。

「それにね、島田さん。最初のテストの試験官はだーれだ？」
と、もう一つの選択肢を与えてあげる。

「あ・・・」

「島田さんが直に制裁しなくても、明久はどの道ものあと地獄を味わうんだよ。」

「そ、そうね。まあ、自業自得だからしょうがないわね。」
と、島田も分かったようだ。そう、この後の試験官は船越先生だ。

「それは、自業自得じゃーん——ごふう！」
と、喋りかけた明久をまた、地へ戻したのはまたしても島田だった。今のパンチはモロにこめかみに入ってたぞ・・・相当のダメージのはずだ・・・

——テスト中——

「うあー・・・づがれだあー・・・」
ちなみに、明久は見事近所のお兄さんを紹介して助かった。

「うむ、疲れたのう」

「・・・・・・・・（こくこく）」

と、総合科目を受けてグロッキーになっている三人に比べ。

「おい、なにをしてる。昼飯を食いに行くぞ。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにするか。」

「じゃー、僕はAクラスに・・・なんて行きませんよー。ナニヲイッテルンデスカ？」

と、比較的元気な俺たち。俺は脅されてるけど・・・

「ん？吉井たちは食堂行くの？だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別にかまわないぞ。」

「それじゃ、混ぜてもらうね。」

「・・・・・・・・（こくこく）」

と、雄二たちのパーティーに島田が加わった。

パーティー構成員：雄二、秀吉、康太、明久、島田、俺

目的地：食堂

目的：昼飯

「じゃー、僕も今日は贅沢してソルトウォーターあたりを――」
明久！それは贅沢じゃない！

「あ、あの、皆さん・・・・・・・・」

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食行く？」

「あ、いえ。え、えつと……………お、お昼なんですけど、昨日の約束の……………」

と、もじもじしながら、約束のことを言っている。ああ、あの殺人弁当のことか。俺は入らないぜ。

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいつ。迷惑がなかったらどうぞっ」

と、すごい量の重箱に入った弁当を持ち出す。

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

「そうですかあー。よかったあ。」

と、安堵する姫路。みんなはこの後起きる悲劇を知らないだけだ。この後は絶対恐怖を感じるだろうね。

「む……………瑞希って、意外と積極的なのね……………」

と、悩んでいる島田。

「島田さんも作ってきてあげればいいじゃないですか？明久の好物なら大体理解してますよ（ボソッ）」

と、島田に提案をする俺。

「ほ、本当？助かるわ。あ、あとお願いなんだけど……………」

（ボソッ）」

と、すこし、もじもじしている島田。なんかかわいいな・・・

「なんですか？」

「私に料理、教えてくれない？」

な、なんですと！？ここで島田ルートに突入なのか！？いや、そんなわけない！俺には愛子ルートしかないはず！

「まあ、明久は料理が上手いからね、負けたらショックだし。女性
は料理ができたほうが魅力的ですからね。いいですよ。僕でよけれ
ば。」

と、快く承諾する。幸い彼女の料理は常識があるからすぐに上達す
るだろう。

「あ、ありがと／＼／＼／」

と、俺と島田にも約束ができた。

パーティー構成員：雄二、秀吉、康太、明久、島田、俺

目的地：屋上

目的：姫路の弁当

「俺は飲み物を買ってこよう。」

と、雄二が率先して行動している。

「どうしたの？いつもの雄二じゃないみたい。」

「昨日がんばってくれた感謝だ。」

「へえー、じゃー、僕も一緒に行くよ。」

ついでに、愛子も呼びに行こう。

「じゃー、ウチも行く。」

「明久、ちゃんと俺たちの分も残しとけよ！」
と、雄二が別れ際に行った。

パーティー構成員：雄二、島田、俺

目的地：自動販売機

目的：飲み物

そして、途中俺は別れてAクラスによっていく。

――Aクラスにて――

「愛子さん、例の物もって来ましたよ。はやく、行きましょう。」
と、あえて弁当だということを隠したのに

「え、本当！ボクもう楽しみにしてたんだよ孝平君のお弁当！」
こいつが、言うから・・・

「あ、愛子さん早く行きましょう！今日も屋上です！」
早く行かないと俺の命が！

「う、うん。けど何でそんなにつて、キャッ」
と、俺は愛子の手を握り、走り出す。

シュカカカカ

後ろにドアに刺さるカッターの後が残った。

――屋上にて――

そこは、戦場のような殺気に満ちていた。

死亡者：康太、雄二、秀吉（重症）

蘇生不可・・・

と、姫路の弁当がもたらした被害は壮絶だった。

康太は欲張り初めに食い、雄二は無理やり食わされ、秀吉は友のためには誇りある戦死をした。

俺は、絶対にお前らのことを忘れないよ・・・・・・・・

まあ、そんななか、俺と愛子は普通においしく、俺の作った弁当を二人でおいしくいただいていましたよ。

そして、作戦会議が始まる頃には俺は愛子連れて帰った。まあ、作戦会議だしな。

開戦は今日の午後からだそうだ。前回の如く、使者は明久だった。

よし、今回も明久に任せておくか。

後日に語られた

「あの弁当は殺人兵器だった・・・」

「塩酸が入ってるそうだ・・・」

「ワシはクロロ酢酸の味がしたような・・・」

などなど・・・

第2章↳恐怖の弁当!?? (後書き)

次回、キャラ説明を入れます。いまだに孝平の容姿を言っていないのでした・・・すみません。あと杏さんのことも説明します。

プロフィール2（前書き）

前回は、本当に申し訳ありませんでした。秋雨さまも本当にもうしわけありませんOTL。気分が害された方も本当にすみませんでした。言い訳はありません。ただの作者の不注意です・・・できれば、これからも読んでください

プロフィール2

プロフィール2

雪城孝平の容姿

髪：黒い短め

目の色：黒っぽい茶色

それ以外の特徴

筋肉はあまりなく、肌が白い方。このことからインドア派だと分かる。

堀河杏

性別：女

髪：茶色よりの黒。髪は長い方

歳：秘密

職業：喫茶店『Delizioso』でウェイトレス

喫茶店『Delizioso』の店長の娘。孝平と会ったのは春休みの中旬ぐらい。接客はうまいが、料理は普通より下の実力。さすがに姫路レベルではない。面倒見がよく、お姉さま気質。

プロフィール2（後書き）

早いかもしれませんが、プロフィールの2個目です。本当に前回はいませんでした。次から気をつけます。というか、自分で書きま

第2章　根元はマジで卑怯、精神年齢は小学生（前書き）

今日も読んでいただいております。なにか、ご指摘があれば容赦なく言ってください。

第2章↳根元はマジで卑怯、精神年齢は小学生

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え

- (1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シュールな光景ですね

吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面蹴ったり

教師のコメント

君は鬼ですか

雪城孝平の答え

(1) 河童を川流し

(2) 泣きっ面に蠅

教師のコメント

君も鬼でしたか・・・しかし、可愛いそーですね。泣きっ面に蠅つて・・・

いやあー、姫路の熱線は何時見てもすごいな。もうメ。粒子砲とか名づければいいのに。

そして、俺は今Fクラスの中にいる。たしか、ここで破壊行為をするやからが来るので、しつらの写真を撮ってあげようかと。

ガラッ

来た来た。ちなみに、俺は隠れてるので見つかりません。

「まったく、早く終らせて帰ろうぜ。」

「だな、見つかったらやべえし。」

「それにしても、あいつ等の絶望する顔が見たいぜ。」
などと、生徒A、B、Cが話している。

バキッ、バキッ

プチ、プチ

そして、シャーペンを折り、消しゴムをちぎりっている。
地味だなコイツら。いや、根元というべきだろうか。
そして、俺はカメラのシャッターをきった。

パシャッ

「「「え？」「」」

「いい写真写りだよ、君たち。後で先生達にも売ろうかな？」
と、言つて親指をグツと立ててあげた。

「「「まで、おまえ！」「」」

「あれえー？こんなところで騒いでいいのかな？Bクラスの人がF
クラスで破壊行為をしてるなんてねえー。」

「そんなの、お前を倒せばいいことだ！」

そういつて、三人とも俺（召喚獣ではない）に殴りかかってきた。
そこに――

ガラッ

明久たちが来た。

第2章 根元はマジで卑怯、精神年齢は小学生

そのあと、明久、雄二と俺でBクラスを返り討ちにして、そこら辺に捨てておいた。

「孝平、危ないところだったね。大丈夫だった？」

「まったく、Bクラスはなにをしているんだ・・・」
俺を心配してくれるのか！？

「Bクラスは、僕たちの筆記用具類を破壊してたんだ。回復試験を受けさせない気だよ。」

「なんて、幼稚だな。誰だよこの作戦考えたの？」

「雄二、Bクラスの代表はあの根元だからね。そして、雄二。これはプレゼントだよ。」
と、いって雄二にカメラを渡す。

「ムツツリーニ、この写真を印刷しといてくれ。」

「・・・分かった。けど、康太だ。」

「わかったよ、ムツツリーニ」
康太かわいそー、名前が忘れられてる。

それから、明久が須川に呼ばれて教室を出て行った。
次に会ったときは、島田に殺されかけていた状態だった。島田もこ

れは、ちょっとやりすぎかな？

俺がBクラスに襲われかけていた頃、雄二はBクラスと交渉をしていたらしい。内容は、4時までに戦争が終結しなかったら、明日に持ち越しだそうだな。そして、その間戦争にかかわる行動を一切禁ずる。

まあ、普通な内容だな。

ムツリーニによると、Cクラスが俺たちに戦争をしようとしているらしい。まったく、汚いやつ等だな。漁夫の利とかさ。そんなことなので、今からCクラスに協定を結びに行く。

「雄二、一つ忠告があるんだけど。」

「なんだよ、孝平？真剣な顔して、似合わないぞ（笑）」

「うるへー。です、Cクラスの代表は根元の彼女だそうですよ。」

「まじか！？あんな糞野郎と付き合う変な女がいるのか！？」

「そうなんです、僕もびっくりしました・・・ですね、Cクラスにただ行くのは危ないから、今さっきの写真を持って行ってください。康太、ちゃんと印刷してあるよね？」

「・・・・・・・・（こくこく）」

そして、康太が雄二に写真を渡す。

「忠告ありがとう。お前はどうするんだ？」

「俺は帰って寝る。疲れたからね。襲われたのは初めてだから。」

「そうか、お前がいると頼もしいんだが、そこまで大人数で行くわけにも行かないか・・・秀吉以外はついてこい。って島田はどうした？」

ガラッ

「吉井。アンタの返り血がこびりついて洗うの大変だったんだけど。どうしてくれるのよ？」

「それって吉井が悪いのか？」

「おお、島田と須川ちょうどいい。お前等来い。今からCクラスに協定を結びに行く。」

「「オッケー」」

ガラッ

「ふむ、暇じゃのう孝平。」

俺と秀吉は教室で二人になってしまった。俺はもう帰るけどさ。

「そうかな？読書でもしてればいいじゃないかな？」

「ワシは読書をするのなら、台本を読んでおるからの・・・あまり、役に立たないんじゃない・・・」

「そうか、秀吉は演劇部だったね。いつか、見に行くよ練習でも本番でも。」

「おお、まっとするぞ。」

「それじゃ。僕は帰るね。今日は勉強でもするかな？どうせ明後日くらいに回復試験があるんだし。」

「そうじゃの。Bクラスに勝ったら次はAクラスが相手じゃ。ワシも頑張らねばの。」

「まあ、無理は禁物だよ。体調を壊したら、元も子もないからね。」

「うむ、そうじゃの。それでは、お主も無理をするでないぞ。」

「自分の体調管理くらいできるよ。じゃあね、また明日。」

「また明日じゃ。」

よし、今日も愛顧と帰ろー。喫茶店なんて行かないけどね。

Aクラス

「愛子さん、迎えに来ましたよー。」

「孝平君いつもありがと。」

「いえいえ、僕が好きでやってることですから。気にしないでください。」

「あ、愛子。今日ももう帰っちゃったの?」

「なにになに？今日もどつか食べに行く？」

「そうしようよ。」

昨日と同じく約束をしている二人。

「今日は俺は遠慮させてもらうね。」

「え？なんで？」

二人とも分かってない！

「俺はそんなに自分の命を危険にさらすのは好きじゃないんだ・・・
命は大切に（ボスッ）」

「ああ、あぁ、ごめんね（なさい）」

「と、いうことで、二人とも楽しんできてね。」

「じゃあね、孝平君。また明日♪」

「またね、彼氏君」

「だから、僕は彼氏じゃありません。」

と、言ってAクラスを出る。ふうー、良かったよ・・・二日連続で
あんなことしたらマジで殺される・・・

そうして、俺の一日は終わった。

ちまみに、家に帰ってちゃんと勉強しました。

第2章　根元はマジで卑怯、精神年齢は小学生（後書き）

ええと、自分のもう一つの作品も呼んでもらえとうれしいです。

『イチの魔法使い』と、いう題名です。ゼロ魔のSSです。できれば、読んでください。どちらとも、駄文ですけど・・・

第2章 Bクラス戦終戦、姫路は嫌いだ (前書き)

今回で、孝平の腕輪が登場です。チートとか思わないでください。その分、代償が大きいんです。これから、読んでください。え、と、このごろ色々とSSを試し書きしてるのですが、このSSだけは絶対に更新します。他のは、暇があれば？この回の前半部分はほとんど要りません。

第2章 Bクラス戦終戦、姫路は嫌いだ

問題

以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのは This だけですか

吉井明久の答え

『
● ♪ ★ — — 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

雪城孝平の答え

『これは私の祖母が愛用していた辞書です』

教師のコメント

辞書とはパソコンの『Bookshelf』のことですか？あなたの祖母はパソコンの辞書を？珍しい。

今日は少し遅い登校時間だ。なぜかと言うと・・・

――今朝のこと――

P r r r r r

P r r r r r

ガチャッ

「はい。雪城です。」

『おはよう孝平君。ちゃんと起きてた〜』

「おはよう、愛子さん。この時間だったら誰でも起きてるよ。」

『そうかなあ？優子は起きてないと思うよ？』

「木下さんはそんなに怠け者なんだ・・・意外だなあ」

でしょ。ボクも意外だよ。

「で、電話の用件は？まさか、こないらない情報を教えに？」

「ああ、そうだった。今日ね、なんかお母さん急に熱出して寝込んでしまったんだよ。それで……」

「僕に弁当を作ってほしいと……」

「そうなんだけど？頼めるかな？」

「分かったよ。じゃあ、僕のところに取りに来てね。」

「りょかい。ありがとねえ。」

「どういたしまして。それじゃ、また後で。」

「じゃね。」

第2章 Bクラス戦終戦、姫路は嫌いだ

そして、今に至るわけだ。

そして、俺は一つ大きな間違いを冒してしまった・・・
 Fクラスに愛子が来て俺と仲良くしてたら・・・
 あいつらに殺される・・・!!??ガクブルガクブル（（（（ ;

。
Д
(
(
(
ア
ワ
ワ
ワ
ワ

そして、学校に到着。

門番の鉄人がいる。いつもどおりすごい筋肉だ。

「おはようございます。西村先生」

「おお、おはよう雪城。お前いいのか？もつそろそろ開戦だろう？」

「あ、そうですね。」

『静かになさい、この薄汚い豚ども！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今のは、なんだ！？

「じゃ、じゃー、僕急ぐんで！」

「あ、ああ、がんばれよ。」

そして、俺は校内に入り、Fクラスに向かう。走って。今さっきのはなんだったのかを確かめるために。

Cクラスを通りかかったとき、優子（本当は秀吉）がいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

こいつだったのか？いや、確かこれは・・・

『おねがいだ！孝平、空気を読んでくれ！』

「お、おはよう、木下優子。ここで何をしてるんだ？」

ギン！！

「こわっ！！」

『きやがつたな！裏切り者めが！』

『裏切りも二には死を！』

「お、お前等なにを！？」

『諸君。ここはどこだ！？』

『『最後の審判を下す法廷だ』』

『異端者には？』

『『死の鉄槌を！』』

『男とは？』

『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』

『よろしい。これより——二―F異端審問会を開催する！』
と、言つて俺に迫ってくる黒い集団、もとい、Fクラス男子。

「いや！待て待て！俺は何もしてないぞ！」

「あ！孝平君！きたよ？」

と、言つて、俺のちゃぶ台に座っている愛子がいる。

「あ、愛子さん。あ、ああ、これ弁当ね。それじゃ、お母さんによろしく言つといてね。」（汗）

「え？うん、言つとくけど。もう、なんでそんな押すのって——キヤッ」

そして、俺は愛子をFクラスの外に追いやる。ふうー、これで心安——じゃ、なかった・・・

「あのおー、みなさん、平和的交渉で解決は？」

『『『無理だ！』『』『』』

『罪人、雪城孝平！』

なんなんだ、俺の罰は！

『死刑！』

「つて、おい！いきなりかよ！俺の弁護は！」

『問答無用！！』

ぎゃあああああああああ

俺のいじめは雄二たちが帰ってくるまで終らなかった。

戦争

「ドアと壁をうまく使っくんじゃ！戦線を拡大させるでないぞ！」
秀吉の指示が通る。いい声だ！

「勝負は極力単教科で挑むんじゃ！補給も念入りに行え！」

『左側出入り口、押し戻されています！』

『古典の戦力が足りない！援護を頼む！』

と、いった風に今は戦争真っ最中である。

「姫路さん、左側に援護を！」

明久が姫路に命令。

「あ、そ、そのっ………！」

くそっ、この女うぜえ！早く明久に言えよ！私は戦えないって！くそ！

「明久！あの作戦を！」

「わかったよ孝平！」

そして、明久は立会人の竹中先生のところに駆け寄り

「……ツラ、ずれてますよ」

と、つぶやうた。効果は抜群だ！

「少々席を外します！」

と、言っでどこかへ消えていった。

よし、この隙に！

「姫路さん、どうしたの？」

ああ、まったく迷惑だよな。まったくさ、きっぱり言って戦線離脱

したほうがいいのに。

「そ、その、なんでもないですつ。」

「なんでもないわけないだろ！」

「ちよつと、孝平！」

「お前は黙ってる！なんでもないんなら、お前が戦えよ！お前は自分がどれだけの戦力か分かってるのか！」

『右出入り口、教科が現国に変更されました！』

「数学教師はどうした！」

『Bクラス内に拉致された模様！』

「私が行きます！」

そう言つて、勢いよく言つたものの、根元のあれを見るとすぐ

「あ……………」

くそ！こいつ、役に立たない！

「おい！姫路！もう、いい！お前迷惑なんだよ！うじうじしやがってよ！」

「うつ……………」

「ちよつと、孝平それはひどいでしょ！っていうか、そんなキャラだっけ！？」

そんな事を言う明久に目線で根元のほうを見るように促す。

「あれは………」

明久も気付いたようだ。

「わかったか、明久？お前のやることも、な？」

「うん、わかった。けど、さすがに今はちょっとひどいんじゃない？」

「ひどくないよ。姫路さんがもっと早く言えばもっと早く作戦が立てられた。」

「そ、そうだけど………」

「もう、そのことはいい。はやく、明久は雄二のところに！」

「うん、わかった。」

そういつて、明久は廊下を走って戻っていった。

「姫路さん！もう、君は後ろにいてだけでいい！」

「………はい」

『くそっ！もうもたない！こっちが崩壊する！』

そろそろ、俺の出番かな？

「試験召喚！」

そして、俺は召喚する。

Fクラス 雪城孝平

現国 402点

まあ、なんとか400点越えた・・・

「え？雪城君ってそんな点数・・・」

姫路のことは気にしないで

「はっ！」

一個のブーメランを投げる。

『ぎゃーー！』

後ろのほうで当たったらしい。運がいいなこのごろ。

そして、もう一個のブーメランを自分の下に置く。

そして、自分の召喚獣の腕をチェック！

そこには、輝く腕輪がある。

そう、400点を越えた召喚中には特殊能力がついた腕輪が装備される。

そして、当然。俺のにもある。その能力はもう知っている。自然と頭の中に能力の情報は流れてくる。

「腕輪発動『聖域』」

そして、その場は光に包まれた。

『な、なんだこれは！？敵の攻撃か！？』

『な、なんだよこれ！』

敵味方両方慌てている。

『ぐあ!』

『な、なんだ! 相手が勝手に倒れていくぞ!』

「大丈夫だ! これは俺の腕輪だ!」

『お前腕輪もちだったのかよ!』

『お、おい! なんだか召喚獣の傷が消えてくぞ!』

『よく見ろ! 点数が元通りになってるぞ!』

「あとは、頼んだぜ、お前等! 明久も頼んだ・・・(ボソッ)」

「え? 雪城君? なんでそんなこと?」

「ほれ、俺の召喚獣見ろ。」

Fクラス 雪城孝平

現国 0点

「戦死者は補修室に集合うう!!!」

『ひい! 鉄人!』

「はいはい、分かってるよ。じゃあな、お前等! がんばれよ!」

『お前の死は絶対に無駄にしないぞ!』

『うおおおおお!!!』

『なんだコイツラ! いきなり強くなったぞ!』
ふっ、Fクラスの真の力は、気持ちの力なんだぜ?

補修室

『なっ、孝平! なぜ、お前が補修室に?』

「まあ、いろいろ合ってな?」

『まあ、仲良く補修を受けようじゃないか?』

「ああ、そうだな」

そして、俺の一日は補修室で終わった。
我ながらなんて不便な力なんだ・・・

戦争終了

戦争は結局俺たちの勝利で終わった。明久ががんばって、壁をぶち抜き、康太が根元を倒したらしい。
なんだか、根元が女装されたとか何とか?
彼女かわいそーだな。ご愁傷様。

そして、今は俺は帰路だ。

愛子と帰っている。今日は、迎えに言ったんじゃなくて、愛子から会いに来てくれた。弁当を返しに来たらしい。

そして、俺はまた殺されかけた。あいつらは冗談抜きに危ない・・・

してあげるよ♪」

キラッ！

「って、お前等なんでここまで！」

『裏切り者には死を！』

「じゃあな、愛子さん！また明日！」

「う、うん」

そして、俺は疾風の如く走り去った。

SIDE 姫路

今日はびっくりしました。まさか、雪城君があんな口調で私のことを怒るなんて・・・け、けど、私だっしょうがないと思うんです。だ、だってラ、ラブレターなんて人に知られたくないし・・・かと、言って皆さんの役にも立ちたいし・・・

雪城君は私の気持ち分からないのでしょうか？それに、全部私が悪いように言うし・・・雪城君は苦手です・・・

SIDE OUT

そんな感じで、雪城を嫌いはじめる姫路さんが始まりました。

第2章↳Bクラス戦終戦、姫路は嫌いだ（後書き）

次回はAクラス戦です。なんだか、今回は長いです。無理やり詰め込んだ気がしますが、許してください。

第2章くAクラス戦、一騎打ち！！今日は運がない！！（前書き）

このごろ、もう作者は夏休みに突入してて、なんだかうつ病でなにもする気が起きません。すいません、更新がとっても遅れてました。他の作品も更新したいと思ってます。これから、よろしく願います。

第2章 A クラス戦、一騎打ち!! 今日はずがない!!

問題

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、???

$\sin A + \cos B$ $\sin A - \cos B$ $\sin A \cos B$ $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \pi/6$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です

土屋康太の答え

(1) $X =$ およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

雪城孝平の答え

(1) すいません、分かりません

(2) すいません、分かりません

P S . すいません、作者も分かりません・・・

教師のコメント

別に謝っても点数は上げませんよ？

Bクラス終戦から二日目の朝

今日の朝ごはんの献立は、食パン、ジャム、バター、ハムぐらいだ。別にひもじいなんて思っていないんだから！

「ああ、つままない朝だわな。ほいつ」

P i

と、効果音つきでテレビをつける。

『ええー、本日の天気は晴れ、午後には上昇気流が近づきます。南

西の風が吹き、比較的暖かい日になりそうです。」

へえー、今日は晴れね。うん、Aクラス戦にはいい天気じゃないか！室内だけど！

『本日の運勢！』

ふむふむ

『まず、どべは魚座のあなた！今日はいいいことがなにもないでしょう！特に女の子とバカには注意！』

まじかよ！くそ！今日はAクラス戦だつてのに不吉だ！つか、絶対に避けられない！！

第2章くAクラス戦、一騎打ち！！今日は運がない！！

今日はなんて清々しい朝なんだろう・・・

雲ひとつない快晴・・・

俺を照らす太陽・・・

そして、今日！俺たちはこのFクラスとお別れする！

教室

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だといわれているものにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのことで。感謝している。」

ナイス演説！けど、きしよいぞww

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？雨が降ったらどうしてくれるんだ？」

「大丈夫だよ明久。今日の天気予報は快晴って言ってたし、午後は上昇気流が近づくから雨は降らないよ。」

「何を言ってるか全然分からないけど！よかったよ！今日は洗濯物を外に干したんだ。」

「お前って洗濯してたんだ・・・」

「雄二・・・さすがに、それはひどいんじゃない？」

「・・・人間じゃない」

康太ひどいこと言うな・・・

「3人なんて嫌いだっ！」

「嫌ってくれ（ください）」

「うわあああああん！」

『おい！明久うるさいぞ！』

『演説の途中になにしてるんだ！』

「非難をいけるのは僕だけなの！他の3人は！？」
しかし、返答は帰ってこなかったとさ・・・

まあ、あのは雄二の長いお話によって

- 1・雄二と霧島による一騎打ち
- 2・科目は日本史の小学生レベル
- 3・大化の改新の年号がでたらこっちの勝ちと、いうことが決まった。

そして、今はAクラス前で木下優子とお話をしている。

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試験召喚戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「毎回思っただけどさ。この宣戦布告ってめんどくない？」

「黙っとけ、孝平！俺だって恥ずかしいんだよ！」

「はは、案外恥ずかしがりやな雄二君でした。」

「うーん、何が狙いの？」

「すげえー、優子は完全にスルーした。」

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

「面倒な試験召喚戦争を手軽に終わらせることができるのはありがた
いけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要も無いかな。」

「賢明だな——」

「——ところで、Cクラスの連中との戦争はどうだった？」

と、不敵な笑みで言う。

「雄二の不敵な笑みなんて気持ちわるいですう。やめてください。」

と、俺が木下優子の背後から声を発すると。

「秀吉姉、お前はそんなことを言うやつだったのか!？」

「ちよつ、私じゃないわよ!コイツよコイツ!愛子の彼氏よ!」
なつ、お前、なんてことを!

『裏切り者には死を!』

「ちよつ、明久と康太!ちよつと待って!僕はまだ死にたくない!死にたくないんだああ!」

と、交渉は進んでいき

4・5対5の一騎打ち

5・Fクラスに勝負の内容を決めさせる

6・代表同士勝ったほうが悪けたほうに絶対遵守の命令をする
と、いうルールになった。開戦は10時から。

「雄二あの約束覚えてるよね?僕が一回戦で行くからね?」

「ああ、分かったよ。他のメンバーは誰にする?」

「まず、僕、雄二は決まってるでしょ。そして、康太、姫路さん、捨て駒として明久かな?」

「ちよつ、今『捨て駒』とか、聞こえたんだけど!ひどいよ!」

「ああ、それでいいだろう。明久うるさいぞ。」

「まあ、大丈夫だよ明久。お前が怪我をしても姫路さんと島田さんがちゃんと介抱してくれるだろ！それなら怪我をしてもいいじゃないか？」

「た、たしかに、そうだ！孝平って天才だね！そんなこと考えてなかったよ！よし、僕はがんばるぞお！」

なんて、単純なんだこの色男は・・・別に羨ましくなんて無い！

そして、Aクラス戦はまくが上がったとか・・・チャンチャン

第2章くAクラス戦、一騎打ち！！今日は運がない！く（後書き）

次回で第2章を終わりにしようかと思ってます。その次は外伝が続くと思います。主人公とほかのキャラとの出会いで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193/>

バカとテストと召喚獣～原作？まあ、ちょっとは守ってみるよww～

2010年10月9日14時41分発行